



323  
507



始







文

選

全





# 擬古文選

琴後集 (村田春海)

## 一 泊酒舎の記

上野の岡の麓に池あり、この池の西なる方を萱がまちとぞい  
 ひける。こゝに蘆原かりそけてついで建てたる伏屋あり。そはた  
 だにその池に臨みたれば、名をささなみのやとなむいふなる。  
 そもく霞たなびく春のあしたは、むかのをの梢をうつして  
 花の鏡にもかひ、鴈鳴きわたる秋のゆふべは、雲間の影をうか  
 べて月のみ船をとどめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるは雪降

花の鏡にむかひ  
 鴈鳴きわたる  
 秋のゆふべは  
 雲間の影をうか  
 べて月のみ船を  
 とどめあるは蓮  
 花咲く夏の日  
 あるは雪降

花の鏡にむかひ  
 鴈鳴きわたる  
 秋のゆふべは  
 雲間の影をうか  
 べて月のみ船を  
 とどめあるは蓮  
 花咲く夏の日  
 あるは雪降



る冬の夜折につけ時にしたがひて、見るめのあはれなむ盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こを古さまの言の葉にのばへて思をやり、また唐風のしらべにならひて心をしもなぐさめけり。かれ魂あへる人々、花にあくがれ月にたどるも、常にこの伏屋をなむ問ひ來にける。一日あるじのいひけらく、世を経て絶えざるものは鳥の跡なり。いでこの屋のたのしみを、人々とあひむつばへる心をも、長くうみの子のつぎくに傳へて、わが名代とせむ。ことこのゆるよし記してよ。とあれば、すなはち筆さしぬらして、いさゝかももののはしに書きつく。寛政といふ年のなとせ神無月。

## 二 知足庵の記

あはれ世のならばしこそはかなきものはあなれ。たかきいやしき品いとことなりといへども、おのがじ、心ゆくばかりなるは稀にて、たゞたらはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては、梢の嵐をうらみ、月をめぐるとしては、尾上の雲をいとふためし。誰かはそのがるべき。林にやどる鷓鴣は、わづかなる小枝のかけをのみたのみ、流に水もとむる風は、たゞ腹ふくるゝに過ぎず。とこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、限あるこの世に、限なきことをおもふべきかは、こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花を摘むゆふべ、閑伽を酌むあかつき、み佛につかふるいとまある時は、氷を碎き雪を煮て、梅尾の昔

林にやどる云々  
莊子、逍遙篇、  
鷓鴣集、深  
林、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>一  
枝、雙鳥飲<sub>レ</sub>河  
不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>滿腹<sub>一</sub>。  
梅尾の昔  
明惠上人が山  
城國梅尾に茶  
を植ゑて、之  
を愛好したる  
をいふ。

いひ論  
満足なるは  
ことハおも  
ハスニ  
心ヲ  
ハスニ



考へたて  
自分なけり  
身かたて  
種教もたて  
論スル

現身

うつせみの世の枕  
水凍すともこ  
うつせみの世の枕  
うつせみの世の枕

をしのおめる業にしも心をなむなぐさめける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、また人をうらやむべきふしをも思はで、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけむことわりにこそかなはめい、でやうつそみの世の限なきもとめある際とは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなく、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。

三 隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさまぐなれど、時にそむき折にあはで、つきぐしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火の

夏着物物  
春のおじろ云々  
清少納言の枕  
草子に、すま  
まじきもの、  
晝吹ゆる犬、  
春のおじろ、  
……八月のし  
らがされ云  
々。

人間  
人間  
人間  
人間  
人間

あた、かなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の人も、春のおじろ、八月のしらがさねをこそ、すまじきことのためしには引きいでたりけれ。かればはかなきすさみも、をりにあひたるはをかし、見所なき本草も、時を得たるはめづらかになむおぼゆる。しかはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門たちならべたらむあたりには、時をすぐし折を失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙かにて、四つの時のゆきめぐるにしたがひて、心をやるべき住居は、いとものかたしや。こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしき所得てはおぼゆれ。しりへは市路につぐものから、前は世ばなれたる望あり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏は水際清き池の蓮葉を舟ならずして手



折り秋は月にうそぶき冬は雪にうたふもすべて山水のあはれをそへざる折なむあらざりけるましてあるじの言の葉もて友にまじらふ事廣ければ時にふれ折を過さず問ひ來る人皆みやび好まざるはなしかくとこしへにあく世も知らぬ高殿なればとて聞中大徳のことさらに時にしたがふてふ事をもて名づけられたるは深き心しらひにこそありけらし。

四 花を惜しむ記

つれづれと降りくらしたる長雨もやうくはれ間おぼゆるにかゝるゆふべをたゞにやは過すべき春のゆくへをもばむ花の名残をも見ばやいざとて律生の門おどろかすなるは我が相思ふ人々なりけりさるはいづこ心ゆく方ならむ

身合アア街オハ街住ヒトシテハ

といふにかしこのみ館このみ園生このごろのけはひ如何に見所あらむといふもあり又なにの山里その河づら猶散り残る蔭をや尋ねましなどもいふをいでかのやむごとなききはの塵もするじとおきてたらむは春風の心もたどらであながちに朝夕かき拂ひなどすめるが所につけてはめやすきわざとも見ゆべけれどかへりては情おくるかたやいかで無からむ又かの世ばなれたるあたりは暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど霞隔つる道のそらもいと遙かなるを暮れかけてはなごか思ひたむさらばわれも人もあひむつばへる羽生田のぬしの住居こそゆかしけれいざ給へ」とてうち連ねて行くに所せき巷の塵はた中垣の一重をへだてなれどやおくまりてのどかなる方をしめつれば木立ものふり

新屋ナヘダラトシヤルガシカカワカトシヤルナ



一般ノ  
好みてたまふ人ノ  
島好み  
築山・泉水な  
どの作り庭を  
好むをいふ。

見入儘  
へろ、方へスグ  
、煙、作、

今日来すば  
古今集、今日  
来すば明日は  
雪とぞ降りな  
はし、消えず  
はありとも花  
と見ましや。

て霞のたゞずまひたゞならずましてあるじは古のみやびし  
たふ人にてなべて世の島好みてふ人の心ならひは學ばでた  
だおのづからなる山里の有様をうつしたればはひりの方を  
ばさながら畑に造りなしてなづなの花など露にうち亂れた  
る、いとつきどし。垣ねをめぐりては、田所廣くうちかへして、  
堰きいれたる水いと清らなるに、蛙の時知りがほに聲たてた  
るもをかしく、畔づたひの道かたぐに分れたるには、花の木  
どもわざとならず植ゑわたせり。さるは夕日にもてはやされ  
たる色香の、雨のなごりおぼえて、心ありげに散り残れる。今日  
こずばとぞ見えたる。あるじは待ち喜べるけはひしるくて、年  
に稀なる。など口ずさみつゝ、風を待つまの木の下におりあて  
うち語らへば、おのづから浮世に遠き心地せらるゝを、誰かは

年に稀なる  
古今集、仇な  
りとなにこそ  
立てれ櫻花、  
年に稀なる人  
も待ちけり。

芳宜園  
加藤千隆。  
こてふにも  
古今集、月夜  
よし夜よしと  
人に告げやら  
ば、こてふに  
似たりまたす  
しもあらず。

市の傍とは思はむ。かくて家路をさへ忘れぬべし。日入りはつ  
れば、時にかへる鳥の音もわかれ惜しみ顔に聞え、入相の聲か  
すかに傳ふるも、春を閉ぢむる心地して、夕暗の空も猶ふりす  
てがたしや。

かくながら花の木陰に月待ちて、  
いざもるとともに散るまでは見む。

五 曇る夜の月を見る

芳宜園の月のまとは、年ごとの契なれば、こてふにも似ぬよ  
のさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるは降り  
くらしたる雨の名残霽れゆかむ空も覺えず、ましてさやけき  
光まちいでむは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみに



夜の錦  
史記、項羽本紀、「富貴不歸故郷」如被襦夜行、誰知之者。

はあらしをこよひは寢で明してまし。などいひつゝ、伊豫簾むなしうか、けて、空のみうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生の花も、いたづらに夜の錦にて、浅茅がもと、の松蟲のみ、やうく、聲添はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

はれ間なき月をいかにといひくゝて、

そらながめにや今宵あかさむ。

かきくらす雲間の影はうとくとも、

月まつ蟲よ、せめてかたらへ。

六 秋の山ぶみ

都の旅居の久しう程ふるまゝに、おのづから住みなるゝこゝ

法輪  
嵐山の東部に  
ある眞言宗の  
寺。

ちのせられて、今はむつまじう語らふ人々も多かるが中に、年ごろ心あひたる法師の法輪にあるがもとより、秋もはや残少うなりにて侍り。山かたづけるあたりは露霜の色も限なう侍るを。あな心おそき主かな。とそ、のかされて、時雨の雲とともにさそはれ行けば、あるじは待ちに待ちたるけはひしるくて、御堂の東の廂かきはらひて、こゝにしはしやすらひ給へ。まづ山ぶみのまうけせむ。とて、わりごなにくれの物などとり出て、の、しりあへり。いかでさはわたさしうは物し給ふぞ。世にか、づらふ事もなき身に、しはば、一日二日は猶こゝにありて、高嶺の秋のほひも心ばうたて、さはのたまひうしろめたきを。あへなく

身に侍れば、  
一身が身まきり  
心つかに  
あつくりと  
なまの。の。の。の  
夜の錦に

にこそたづね侍らめ。といへ  
名のあらしはたゞ時のまも  
になしはて侍らば、いかに口



山とて伴ひつ  
ひいづ新發意の年まだ二十  
たなる程のわらはに、かの調  
は常の道にもよらじ、たゞ木  
末の色をのみしるべとせむ  
たる跡をたづねて、した照るなげをしたひ行けば、所せき木の  
根岩かどなどのいと歩み苦しきを、からうじて少し平かなる  
かたそばに出でぬ。こゝは木立もまばらにて、望も限なければ、  
苔のむしろにおりゐて見るに、げにも高嶺のかたは、たゞいく  
むらともなく、錦をはりたらむやうにて、日影にかゞやきあひ  
たる、目もあやなり、麓を見やれば、大堰の河遠く流れて、花田の  
布引きはへたらむやうなるに散りうかべる木の葉は、紅の纈  
纈晒せるが如し。かの見ゆるむかひの山のこと、に色こきは」と

結織

きのふはうすき  
拾遺愚草、小  
倉山しぐる、  
ころの朝な朝  
な昨日にうす  
き四方のもみ  
ぢ葉。  
法然  
僧源空。浄土  
宗の開祖。  
延喜のみかど  
醍醐天皇。

いへば法師のいひけらく、これなむ小倉の峯なる。ふるくは中  
務の親王のかくれ家しめ給へること聞え、またかの定家の  
まうち君の『きのふはうすき』とよみ給ひけむも、かしこには侍  
れど、今はいづれもその跡とてはさだかにはえ知られ侍らず。  
又二尊院とて尊き御寺の侍るは、法然大徳の跡とゞめ給ひけ  
るより、今にそのなごり忘れず。などいふ。さるはあはれなる御  
物語にも侍るなれ。古き世を談るにつけても、この流の遠き昔  
をくみ侍れば、かの延喜のみかどの秋のみゆきの事こそ、をり  
からことにしたはしうは覺え侍れ。そのかみ名高き歌人みな  
諸ともにまゐりて、みことのりのまに、歌ひ出でたる言の  
葉どもの、秋の錦にもおとるまじう侍りつるは、たとしへなう  
をかしうこそは侍りけめ。物かはり時うつるひゆき侍りぬれ



八海山岸巴  
の松に  
こととゆ  
かゝる行幸代  
ありし昔も

どたゞこの山河の昔にかはる世もなければ、今も目の前に見  
る心ちのし侍る。などいふをかたはらなるわらはの聞きて、こ  
のみぎはの松のいと深く見ゆるは、古きみゆきの事問ひけ  
むは、この木にはあらずや。などいへば、  
みゆきせしむかしの秋をいかにぞと、  
またも入江の松にとはばや。  
と歌ふを、法師のきゝて、松にのみやは問はむ、みねの紅葉もこ  
ころありげに見ゆるを。」とて、

小倉山いまでもみ幸を待ちがほに、  
峯の紅葉ぞにほひことなる。  
といひつゝ、かはらけとり出て酒たうべなどす。かの新發意も、  
人なみにもものいはむとにやあらむ、から歌ひとつ口ずさみい

でたれど、まだかたなりなるが、文字のこゑうちあはねば、こゝ  
には書かず。かくて日影やうく、かたぶき行きて、夕をつぐる  
鐘の音はるかに聞え來れば、猶分け見まほしき方も多かれど、  
うちつれて御堂にかへりぬ。たゞ今日の山ぶみの猶あかぬこ  
となどいへば、あるじの「我もさこそはおぼゆれ。あすは大井よ  
り船さしのぼせむ。」とあれば、さらば戸無瀬の紅葉をも見ばや。  
などいひて、その夜は寝ぬ。

七 初鴈を聞く

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野づらのすまひぞ言はむ  
かたなくをかしき。そともの小田の穂なみはかつと、色づき  
そめて、ま垣のものと小萩は、をりえがほにほころびわたれる、

北月 行幸  
代り



日てき  
おき

山を望めば

和漢朗詠集、

望山幽月猶

藏影、听砌

飛泉轉倍聲

霞みていにし

古今集、春霞

かすみていに

し雁がれば、

今ぞ鳴くなる

秋霧の上に。

露のにほひ、風のおとなび、いづれあはれを添へざるなむなかりける。さるは夕月のおもしろきを、たゞにやは過ぎむとて、蓬生の露うち拂ふなるは、わが魂あへる人々なりけり。伊豫簾高う巻けば、むら雨の名残の雲は、絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゞ、ずまひも、月影にもてはやされて、やうくあらはれ行きぬ。山を望めばかすかなる月。と口ずさみ出づれば、をりしも峯飛びこゆる一つらの聲さだかなるは、この麓田に落つるなるべし。げに萩のうは露もたゞならずなどいひしらふ程に、一人がいひけらく霞みていにし雲路の名残なくおぼえしを、秋霧のうへに聲き、そむるがよに珍らかなる事はさらにもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのばへ、すゞるなる心を動かしつべきくさはひ多かる

よ

中に、世を恨みては、人の心の秋を悲しみ、憂きをなげきては、中空に物をおもひ、遠き友をしたふとては、玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへては、この世をかりとたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでや今宵のなぐさめに、このくさぐさの心によそへて、おのくことおぼへ給はむなり。とあれば、澄みのぼる月影にむかひて、うそぶきいでたるは、心々の引くかたなるべし。

世を秋となきて過ぎくる初鴈を、  
わが身のよそに聞きやはつべき。  
となむあるは、世をあぢきなく思ふかたあるにや。  
むねの雲いつかは晴れむ、初鴈の

聲もらすべきおもひならねば。



いかなる人のうへならむ。

旅衣たびいいくたび秋をかさねまし、

こは故郷を忘れぬ人なれば、

かりがねのおくれ先だつ十つらを、

定めなき世のたぐひとも見む。

「法師めきたる口つきや」と人々いひあへり。

八 山里の紅葉を見る

都の旅居はおのづから心のとまりて、今年もいつしかと秋を  
さへ過しにけり。降りみ降らずみ、定めなき雲のけはひのたゞ  
ならぬにも、まづ西山のをかしさおもひ出でらるれば、はやう

あひ知れりける秋篠の朝臣のやどりとて訪ひ來ぬ。この朝  
臣は、いまはもよしきのつかさ位をしぞきて、嵯峨野のおくに  
うき世の塵をのがれ出でて、ひとり古のうま人の操になむな  
らへりけるさるはあるじのおのづからなる心しらひもしる  
く、萱が軒端はたゞかたぶくまゝなるが、板間のしのぶのみ所  
を得て、おどろなる垣根は、かたへたえくゝなるを、ゆひだに添  
へねば、さらに野べのけぢめなむあらぬに、なほ野分の名残お  
ぼえて、萩薄の心のまゝに枯れ伏したる、今は小鹿の路さへ絶  
えにけりと見ゆるも、そゞろにあはれすゝまるゝ住家なり。く  
やしく過ぎし昔の事どもうちかたらふほどに、あるじのいひ  
けらく、きのふ爪木のたよりに、あげまきが一枝もて來れるを  
見しに、露霜の色こそくまなくなりにつれ、いざたまへ。」とあれ



まて言問はむ  
新古今集、篋  
師よまて言問  
はむ、水上は  
いかばかり吹  
く山の嵐ぞ。

ア  
ア  
ア

亭子のみかど  
宇多天皇。

ば、うちつれて出でぬ。山ぎはたどり行くほど、大井の川水まぢ  
かう見わたされて、波間をくだす瀬々の筏は、たゞ錦をつむか  
と目とゞめらるれば、まて言問はむ。など口ずさみつゝ、行くに、  
やがて御幸橋とかいふなるを渡れば、嵐の山はたゞ手にとる  
ばかり近きに、入日ほのかににほひて、空さへこがるばかりな  
るが、山風はるかに吹きおろして、道もさりあへぬまで散り來  
めるは、また類やはとぞおぼゆる。かくて朝臣が唐歌によび  
出でたるを、そのこゝろにこたへて、

ゆくかたは紅葉を橋に渡すなり、

天の河原に我や來にけむ。

また、むかし亭子のみかどの御舟とゞめ給ひし渚は、こゝぞと  
いへば、

大御舟つなぐ綱手のからにしき、

むかしおぼえて散る紅葉かな。

橋の詰よりは北に、葦古りたる寺あるに、入りていこひぬ。渡殿  
など物さびて、はらふ心なき嵐の庭は、苔路も見えぬばかりな  
るが、たゞこがねを敷けるやうなり。これなむ聞きわたる麓寺  
なりける。やうく暮れゆけば、今宵はこのみ寺に籠りて、明日  
なむ高嶺の雲をわくべきとて、朝臣が、

いざさらば紅葉かたしき、今宵もや

しらねの雲にやどはからまし。

とおもふも、世捨人の心やすしや。

### 九 雪をめぐ



かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなむ  
多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよるこぶ、三つの  
ならはしこそ、世にたぐひなき、すさみとはすめれ。ことさへぐ  
から人のためしにも、敷島の大和の國ぶりに、貴きも賤しき  
も、隔つる事なく、古より今にかよはして、これを歌により、文に  
記してめであへるは、いづれを劣れりとも、いづれを優れりとも、  
品定むべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべき事な  
らねど、所にしたがひ、人によりて、おのがじ、心の引くかたな  
くて、やはあらむ。梓弓はるのあした、うらくとひもと、きそむ  
る花の心をとほむには、まづがしこの野づかさ、この山里露  
をしのぎ、岩ほをたどりて、名ぐはしき蔭をもとめてこそ、たぐ  
ひなきにほひをも見るべけれ。おどるなる垣ほのうち、あやし

き伏屋の前に、一木ふた木をうつし植ゑたらむはなかく、に  
花のおもてをぞ伏せつべき。また真萩さく秋のさかり、隈なき  
月の光は所をわかねど、あるは高どのの簾をからげて、千里の  
空をのぞみ、あるは行く河の流に浮びて、水底の影をもてあそ  
びてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家しみ、に立ちならび、は  
たばりなきはひりの庭に、うづくまり居て見むには、塵あくた  
けがしさも、澄みわたる光にいよ、あらはれ行きて、かへりて  
は月うとかれとぞおぼゆる。か、れば月と花とは、所がらこ  
そあはれもうち添はるめれ。さるは、かたの翁がたぐひの、しづ  
たまき品賤しくして、うつゆふのさく、るしき住家にかきこ  
もり居つ、くさづ、みやもひにのみか、づらふ身は、かの高  
殿の望、やかたのすさみは、いかでか思ひもかけむ。又野山の遊



も、おのづから時におくれ、をりを過して、常に心にそむくふし  
なむ多かめる。かれ雪ばかりはこの二つにことなり、葎にとお  
たる門の板も、たゞ一夜のからに、玉しく庭とうつろひ、あば  
らなる板やが軒も、時の間に白がねをはやせるばかりに、すが  
たをかへもて行きて、朝夕のいぶせさもさらにおぼえず、また  
目なれたる市のちまたも、たちまちに景色をそへて、いひ知ら  
ぬ山里のおもひをなし、行きかふあき人の蓑笠までも見所あ  
りと覚え、はかなき木草よろづのものも、さながらめづらかな  
りとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、  
所をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心にたらはぬこと  
なく、外にうらやむべきふしもあらねざれば、この雪にのみ翁  
が心をよするも、所にしたがひ、人によりたる、老のすさみなる

はや。

一〇 山里人の許へ

年あらたまりては、なに事かおはすらむ。春の日數もまだ淺き  
に、岡べの下もえは、今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給  
ひつや、谷の戸の初音は、いつよりか御朝寢の枕をば驚かしま  
ゐらせた。いとなむゆかしき。こゝには、こぞの雪の名残にや、  
風のけしきも冬めきて、猶霞みもやらねば、巷の柳のうち烟り  
行かむほど、心もとなう見え侍り。さるは一年、籬のもとに移  
し植ゑ給へるしも、雪のうちよりも、いちはやく笑みさかゆと  
なむ宣はせし、この頃こそ心ことにほひ出で侍らめ。いか  
で一枝をと思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いとうれしうな



知る人  
古今集、君な  
らで誰にか見  
せむ梅の花、  
色をも香をも  
知る人ぞ知  
る。

む。

知る人のたぐひならねど、梅の花、  
色香をわれに惜しまずもがな。

市のうちに隠る  
文選、「小隠  
隠、陵殿、大隠  
隠、朝市。」

一 上田秋成が許へ  
春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今  
はいはほの中なる住ひをふりすて給ひて、巷の花柳にたちまの  
じらひ給ふらむは、いかに心ゆく御すみかならまし。  
巢ごもれる谷の鶯いかなれば、  
みやこの春に心ひかれし。

となむ聞えまほしき。されどき世の塵の遁れがたかなるも、  
猶市のうちに隠れけむ古人のためしにならひ給ふべければ、

世のさが知らぬ人々とのみみやびかはし給ふらむは、山住の  
つれづれならむよりはと、おしはかり参らすものからいた  
づらに千里のよそにありて、萬づまのあたり聞え承らぬこそ、  
あかぬ業なれ。さはいへ雁の翅の行きかひだに絶えずば、中々  
に遠くて近きたぐひとや思ひなぐさみ侍らむ。柳の絲のくり  
かへしつゝ、今年もとだえなく、聞えまらばやと思ふを、ゆめ  
鶯の鳴く音をしみたまひそ。

一一 月花のあはれをことわる

花をめぐらしみ、月をあはれむならはしなむ、ながれての世は  
さらなる、その源を考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りける。  
花に心を慰めませしは、稚櫻の宮にはじまり、月を言の葉にか

稚櫻の宮  
履中天皇。



物おもひなき春  
古今集、年ふ  
れば齡は老い  
ぬしかはあれ  
ど、花をし見  
れば物思もな  
し。  
くは、る老  
古今集、大方  
は月をばめで  
じ、これやこ  
の積れば人  
の老となるも  
の。  
花の命を云々  
櫻町中納言藤

けたまへるは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原  
奈良の御世にいたりては、歌人おほく出で来て、かたみにみや  
びをかはし、こゝろづくに思をのぶること、皆月花をもて、心の  
種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、このす  
さみいよく、盛になりもて行きて、あるは物おもひなき春を  
花に喜び、くは、る老を月に歎き、あるはさかしきも愚なるも、  
たよりなき所に花をたづね、しるべなき闇に月をたどり、ある  
は花の命を神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、また下が下  
なる、たき木こる山がつ、いぶせきふせ屋の賤の女までも、月と  
花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるは、かけまくも  
畏きおほみ遊の、きはことなるが中にも、月と花とのためには、  
時にのぞみて、ことさらに宴の筵をまうけ給ふこと、掟たがは

原成範が天照  
大神に櫻の散  
らざらむこと  
を祈れるをい  
ふ。  
月のゆくへ云々  
新勅撰集、月  
かげは入る山  
の端もつらか  
りき、絶えぬ  
光を見るよし  
もがな。

ずのどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまざ  
まなる世々の跡を見るに、古も今も、高きも短きも、月と花とを  
うむかしみ思へること等しくて、いづれを餘れりとし、いづれ  
を足らずとして、一かたに心よせたる人、誰かはあらむ。しかる  
を、今にありて、そのよしあしをことわりいはむは、人わらへに  
もなりぬべし。しかはあれど、これをことわるゆゑあり。そのお  
とりまさりは、もとより彼にはあらざれど、おのがじ、うち  
見る人の身にたぐへ思はむには、そのよるかたいかでかなか  
らむ。そも、花は春にありて、賑は、しきにより、月は秋にあ  
りて、悲をぞおこすなる。今この朽ち翁が心にとりていはば、身  
すでに老いにたれば、つぼめる花のさかり待ち出でむ樂もな  
く、品賤しければ、花々しき世を経て、時にかをらむ願もかけず、



芳宜園の大人  
加藤千陸。

たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜を見ては、月の影か  
と驚き、傾くよはひをおもひては、入りかたの月ぞ身によそへ  
つべきか、れば花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひか  
れける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり。おほよその  
人のためには、いかでかまねびもいでむ。

一三 芳宜園大人を祭る文

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の  
おくつきのみ前に、菊の初花一枝を手向け、香の木一ひらを焼  
きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君はわれに十と  
いひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ  
出づるに、君はまさになさかりの齢におはして、我はまだわらは

縣居  
賀茂真淵。

にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、  
あしたにまゐるとしては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべ  
にまかるとしては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみま  
つれる事、親子はらからにもなにかことならむ。書讀むとは、  
君を師ともたふとみ、歌つくるとは、われを弟のつらにぞ教  
へ給ひける。中頃にして、君はつかへの道にいとなくおはし、わ  
れは世のさがにかゝづらひて、おのづからうときかたにも過  
ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、われも同じ巷にうつ  
り住めば、花を尋ぬとは、われ道しるべをなし、月をおもふと  
ては、君が舟にあひ乗り、うき事もともに憂へ、嬉しきふしもと  
もに喜びて、世にありふるわざの、まめ事も、あだ事も、かたみに  
隔なく心をかはせる事、今に二十年、その初をくりかへし數ふ



くひせを守り  
韓非子、宋人  
有耕田者、  
田中有株、兔  
走觸株、折  
頸而死、因  
釋其耒而守  
株、冀復得  
兔、兔不可  
復得、而身爲  
之

宋國笑。  
舟にきたつくる  
呂氏春秋、楚  
人有涉江  
者、其劍自舟  
中墜于水、  
遽刻其舟、  
曰、是吾劍所  
從墜也、舟止  
從其所刻  
處、入水求  
之、舟已行  
矣、而劍不行  
求劍若此、  
不亦惑乎。

れば、あひ友たる事、すでに五十とせにぞあまりける。さるを今  
おくれたてまつりて、いつの世にかあひ見む、いづれの時にか  
こと問はむ。常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいか  
でか歎かざらむか、るを誰かはよく堪へむ。あはれかなしき  
かも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだり、行けるを、賀  
茂の翁世に出でて、今をすてて古にかへり、青雲の高き心しら  
ひをもとめ、しづはたのあやあるみやびごとをたふとみいへ  
れど、くひせを守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こ  
こにひかれて、猶あやしみとがむるたぐひは多く、たまあひて  
よくうけ引く人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、あま  
ねくさとし、廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづ  
なひ、遠き人ははるかになびき來て、古ぶりの歌、世に盛になり

にたるは、誠に君の力によりてなり。そのみづからよみ出で給  
へる歌を見るに、舊きしらべ、新しきすがた、とりとにそなは  
らざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂の御世におよび、  
後のたくみにならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず。心にお  
もふ事は、口につくさざる事なく、目にふるゝものは、詞にのせ  
ざる事なむあらざりける。これを見て、高きも短きも、めでたふ  
とまざる人なし。又ことこのみの人は、その名を君に知られて  
は、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君のうたを得  
ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く悦びける。しかるを  
今、こがねの聲たちまちやみて、玉のひゞき再び聞えずなりぬ  
るは、わがどちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひとも  
いひつべし。これをいかでか惜しまざらむか、るを誰かは慕



はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかくことあげするを、泉の下  
にもさやかにきこしめし、天かけりても遙かにみそなはせと  
なむ申す。

うけらが花 (加藤千蔭)

一 紅梅

「咲く花のほふがごとく」といひけむ奈良のおほん時、不知火  
の筑紫の大みこともちの館に、下つ司人らをつどへて、梅のう  
たげし給へりしを古きためしにて、世々この花をなむめであ  
へりける。おほよそ草木の花の、天地のなしのまに、咲きい  
づるにくさぐさの色ありといへど、白妙なると紅なるとに勝  
れるしもあらざりけり。そが中にもけぢめありて、百入千入に  
色こきは、こちたくちたてありて、かしこき際のきぬの色めに  
さへかよへばにや、たはぶれにくし。あら染の浅らかなるは、し  
もぐのみじかき袖おぼえて、品おくる、かたになむおもは

咲く花のほふ  
萬葉集、青に  
よし奈良の都  
は、咲く花の  
匂ふが如く今  
さかりなり。  
大みこともちの  
館  
太宰府のこ  
と。



る。たゞ梅のゆるし色なるが、おのづから花びら毎に光こも  
りて、その香さへこよなきに如くものやはあるべき。こゝに紅  
の梅を植ゑて、年のはに花のさかりには、みやび男のともをつ  
どへて、その花めづる人なむありける。今年如月半ば過ぐる頃  
いざといふまゝに、かのやどりを訪ふに、ひろらかなるつぼの  
うちに、一もと立てるが、高きやの軒のつままでおひのぼりて、  
その枝はしみゝにひろごり、その花はをりにをり、おもふ  
事なげに咲きみちつゝ、おぼしまによりぬる人々の面わに照  
り、衣手にくゆりかゝれり。かの筑紫の館には、紅なるやなかり  
けむたゞ雪にまがへるをのみ愛であへるは、あかぬさびに  
こそおぼゆれ。ひねもすあからめせでうたひいづらく、  
すがのねの長き春日も、くれなるの

梅さく宿は立ちうかりけり。

## 二 蓮を見る

大比叡うつされたる上野の岡の麓比良の大わだなせる池水  
のほとりに、さゝなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋  
あり。白たへの富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くとい  
ふなるころ、人皆涼みせむとてそのやどりにつどひて、高き屋  
にのぼりて見たせば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の  
花の咲きみちたるにてはありける。おひたてる葉のひろごり  
たるは、宮路ゆくうまびとのきぬがさの如く、浮きたるは、大庭  
に百の司のわらふだ敷き並べたる如く、葉に置ける露は、白玉  
の五百つ集ひを解きみだしたるになむ似たりける。池の水清

大比叡  
山城國比叡山  
のこと。  
比良の大わだ  
近江國琵琶湖  
のこと。



四の湖  
支那浙江省杭  
州府城の西に  
ある湖。

日の入る國のま  
すらの法  
印度の佛教の  
こと。

らに澄みて、あそぶいろくづ思ふ事なげなり。人々衣の紐を解  
きさけ、おぼしまに寄りゐて、酒汲みかはす程彼の岡の木高か  
る瑞枝吹きこす風の涼しきに、えならぬ香のかをり來るもた  
としへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤をつきて、石もて  
作れる橋かけわたせるは、もろこしの西の湖とかいふめる所  
のさまかけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のには  
ひさへなつかしく見ゆ。あるじは吾が國ぶりの歌つくり、書見  
ることをしも好めるが上に、こと國の書をさへに晨夕べの友  
とせりければ、さるかたの友垣にも乏しからず。唐歌好める何  
がしの博士は、さぬりの小舟に唐少女載せて、この花折らせ  
まくおもひ、日の入る國のますらをの法に心をよするは、是ぞ  
この上の品のうてなに生れ出でたらむ心地する。などいひあ

へりけり。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで、住む人の

友と見るべき花ぞこの花。

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間のぎて響きわたれば、み  
盛りに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるも、  
あはれふかゝるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもとむる  
ものをとて、人々あかれ歸りぬ。

### 三 隅田川の秋雨

葉月二十日あまり、秋のけはひなつかしくて、例のすみだ河の  
ほとり、石濱のいほりに行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、  
霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨

上の品のうてな  
上品の蓮蓬の  
こと。極樂往  
生を上品・中  
品・下品に別  
け、更にその  
各を上生・中  
生・下生の三  
等に區別す。



のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける  
庵なれば音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、  
籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。  
水のおもては動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄き  
うつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはし  
るかりけれ。水脈の一すぢは、さしひく汐にもまじらで、ほに  
花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山  
の眞清水の落ちくるならむ。うち向ふ岸の榛原み濃き墨が  
きの如くなるが中に、柞はこその黄ばみたるはさすにほのかに見  
えて、そのひま／＼より、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる  
梢は、やう／＼にうす墨もてかきけちたらむ如く、いとしもは  
るけきは、たゞなびかぬ烟とのみぞ見ゆる。こゝかしこより、鳥

の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさ重げにおき出でて、河の  
瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れ来て水の面に浮べるも  
をかし。上つ瀬より筏師の蓑笠著て、棹を筏の上に横たへ、おの  
れたむだきて、思ふことなげにて居り、筏は水のまに／＼流れ  
行くも静けし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけて、わたり行く  
人の、やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。すべてひと日  
のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ  
来て、岸の木立も、長き堤も、あるは顯れ、あるは隠れて、限なき青  
海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてや  
や夕ぐれ近くなりゆけば、むら鳥のおのがじ、埒もとむるに、  
雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむかたなし。暮れ  
はてても猶行く水の色のみ遠白く残りて、川添小田にいはいはへ



るみくまりの神のみ火の、海人のいさりともしいふべく、かすか  
に見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田河、

たが墨がきのすさびなるらむ。

四 山水のかた寫したる繪を見る

文机により居つゝ、ほどなきつぼの中の草木をのみ憐みてお  
もひ足らはせるにしもあらず、名ぐはしき芳野の山の奥をと  
め、久方の天の橋立をたづね、常磐なる松がうら島にわたりて  
ぞ心ゆくかぎりなるべきを、遠く出でたゝむもいたづがはし  
くもの憂ければ、いぶせき庵のうちに籠らひ居るよ、ますらを  
のとごゝろなしとやいはむ。そもまたおのがさがなればいか

がはせまし。いでや山田の曾富騰といへる神の、足行かずして  
千里の外まで心をはなちやりてむわざもがなと思ひめぐら  
して、山と水とのすがたを壁に畫かせて、心をしづめてうち向  
ふに、岩が根のこゞしき嶺よりみなざり落つる瀧つ瀬あり。か  
たへのを岫より横ざりわたる白雲に、なかば絶えて麓に落ち  
くるはその響聞きつべく、そが末つ方は水のおもてに造り出  
せる檜皮屋のもとまで流れたり。簾高く巻きて三人四人おも  
ふ事なげに語らふ様を見れば、我もその人にえ交らひをる心  
地す。木高き松に日蔭生ひたれて、梢には猿群れあつゝ、木の實  
とり食むなどもをかしきや。つゞら折なる山路をたつか杖曳  
きて上り行く人あり。童琴を抱きて隨へり。何處へ行くならむ  
と見れば、山のなからばかりの平かなるに、黒木もてあづまや



舟の浮る  
も、水際の  
蘆間に、  
を  
よみける。

造りて、ひとり笛吹きすさべる人のもとをさして訪ふなめり。  
はるかに木立うちけぶれるひまゝに、小さき家居見えて細  
きたな橋渡したるを、駒にのりて行くあれば、水際の蘆間に、を  
舟浮べてさでさしおろし、あるは釣垂るゝなども見ゆ。朝な夕  
なこを見れどあかれぬあまりに、かの瀧のもととなる人の心を  
よみける。

心さへ澄みわたりけり、とこしへに

みなぎる瀧の音になれつゝ

### 五 雪

あら玉の年の一とせ、ありとある心ずさみのとぢめに、雪こそ  
なほおもしろく心ゆくものはあれ。籬の千草も残る色なく、軒

龍田彦  
風を掌る神。

の紅葉も散りはてて、たゞ龍田彦のうらさびませる嵐の音の  
み烈しかりしを、いつしか風の音も静まりて、雲のたゞずまひ  
長閑になれるみ空より、いづこともなく落ちくめるは、風のさ  
そはぬ櫻花の心づからうち散るなして、小笹が上にはだれ降  
りたるは、霜の置けるさまに見えわたるを、やゝ降りまさりつ  
つ、千萬の鷺の飛びかけるが如く見ゆれば、忽ちにあらはなり  
し梢には、こもりくの初瀬少女が造りなせる白ゆふ花を咲か  
せ、常磐なる木々には、不知火の筑紫の綿をかづけつゝ、見わた  
さるゝ檜皮屋も藁屋も、ひとつ色になりぬ。しかすがに松につ  
もれるは雄々しく、柳にかゝれるはたをやかにして、くさくさ  
のけぢめ見ゆるもあはれなり。かけまくもかしこき九重には、  
雪の山をつくらしめ給ひ、百の宮人朱雀の大路をねりてまう



のぼり、あるは摺衣著よそひ、駒に乗りて、白斑の鷹を手にする  
て、交野の御野にきそひ出で、あるは網代車走らせて、道すがら  
笛吹きすさびつゝ、思ふ方をや訪ふらむ、あるは棚無し小舟漕  
ぎ出でては、袖さゆるをしも忘るらむなど、目の前に見るごと  
おもはれて、面影にうかぶばかりなるもあやしきや。入相の鐘  
の聲に争ひて、猶暮れなむともせぬを見はやすほど、雪やみて、  
おほひふたがりし雲、跡なくはれわたりて、月さしのぼれば、  
天地の限り、鏡をかけなべ、玉を敷きみてたりとも、かくやはと  
思ふばかり照りかゞやける、はたいふべくもあらずなむ。

かくながら心のゆかぬくまもなし、

月にてりそふ雪の光に。

泊泊文藻 (清水濱臣)

一 萩をめぐる詞

木の花は春に匂をつくし、草の花は秋を時とすれば、誰もみな  
春は山邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常と  
はすれ。そもくゝ花野の秋に咲きみだるゝ、千草は、とを、はた、み  
そ、よ、そ、その數多かめれど、これはしもと取りいでて愛でもて  
あそぶべきは、彼の山上の國司くにつかさのよみおかれたる七種になむ  
盡きぬべき。そが中にもまた勝れたるは何れかと定めむ。女郎  
花はいとなまめかしく懐かしげなれど、唐人もなにがしとか  
その名をよびておとしめたるもことわり、花の盛りなる程こ  
そあれ、はてくゝはうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りた

山上の國司  
萬葉集中の歌  
人、山上憶良  
のこと。伯耆  
守たりき。萬  
葉集、同氏の  
作、七種の歌、  
「秋の野に咲  
きたる花をよ  
び折り、か



き數ふれば七  
草の花。萩  
が花尾花葛花  
撫子の花、女  
郎花また藤袴  
朝顔の花。  
唐人も云々  
女郎花を敗醬  
または苦蕒菜  
などいふ。

秋とはいはむ  
萬葉集、人皆  
は萩を秋とい  
ふ、よし吾は  
尾花がうれを  
秋とはいは  
む。

るなごりなどもあさましきまでに、鼻さへうち覆はるゝや。撫  
子は唐に倭に色を交へて美はしくあてなれど、常夏にうつろ  
はずして、秋にまで咲きかゝれるが飽きたる方もあるべし。朝  
顔はいとらうたし。朝ごとに色改むるなど心地清げなれど、こ  
れはまた見る程もなく萎れわたりて、露のひるまをだに待た  
ぬぞ事足らぬ心地する。葛は風のまに／＼吹き返す葉末のう  
ら珍しきこそあれど、はひ廣ごりもうるさく、藤袴は匂のいひ  
しらぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ  
古き歌にも「秋とはいはむ」と詠みたれば、あるが中にも優りた  
るやうなれど、廣き野末にめぢのかぎり高やかにさし靡きた  
るは、白妙の袖とも誤たれて心とまる心地すれど、二もと三も  
とが處せきつぼの内などに生ひたてらむは、何のをかしき節

あらむ。いでや萩の花を見よ。秋の初風やう／＼身にしみ渡る  
程より、かつ／＼咲きそめて、或はなだゝる大野ら、或は程なき  
前裁、多くも少くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤  
がはひりをきらはず、處えて匂ふさま懐かしくはた愛でたき  
にあらずや。さらば七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れ  
たるは、この花をさしおきて、又何れとかいはむ。

## 二 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ  
もまたしきる。雁がねの聲の擣衣を誘ふにやあらむ、擣衣の音  
の雁がねをさそふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこ  
の音の悲しきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆるか。



故郷の鱸  
晋の張翰が秋  
風の吹き立つ  
を見て、故郷  
の名物なる蓴  
菜の羹と鱸魚  
の膾とを思ひ  
出し、官を辭  
して故郷に歸  
りし故事をさ  
す。  
王公の位云々  
太公望呂尙が  
困窮して年老  
い、漁釣して  
周に至り、渭  
水の陽にて文  
王に遇ひ、遂  
に王公の位を

皆あらず、聞く人の心のわびしきなり。  
*かきふしきが改たこり存にさびしくかえりて*

### 三 漁父辭

秋吹く風に耳欬てて故郷の鱸のなます思ひ出でけむ人こそ、  
げにさる事とはおぼゆれ岸の額に老の浪をたゝみて、直なる  
針に王公の位を釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我は  
たゞ世を捨舟に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からむあ  
たり、息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき樂とはなしぬべ  
きぞかし。

### 四 筆の跡を見て亡き人を偲ぶ

この夏は、例よりも照りはたゞきて、いと堪へがたければ、何く

得るに至れる  
故事をさす。  
秋風のそよと  
古今集、秋來  
ぬと目にはさ  
やかに見えれ  
ども、風の音  
にぞ驚かれぬ  
る。

半は泉に歸す  
和漢朗詠集、  
「往時渺茫都  
似夢、舊遊零  
落半歸泉。」  
萩の屋のあるじ  
植村正路。

れとなすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ  
暮しぬるを、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒にかくての  
みやはとて、ひぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら數の  
かぎりひき廣げて、日に曝し風入るゝに、塵箱の底にこめられ  
て紙魚といふ蟲のすみかとなりにし反古どものいと多かる  
を、かゝる序に一つ二つと取うでつゝ、開き見るに、早くより睦  
びかはしたる友垣の言の葉どもの中を、およびを折りて其の  
人彼の人と數ふれば、半は泉に歸す。とうちうめかるゝ中には、  
此の頃まで花にとひ月に向ひし萩の屋のあるじのなむ、わき  
て數多く見出でたる。昨日まではありのすさびに見棄てたり  
しを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そゞろうちまもられ  
て、流れ落つる涙の、水莖の跡にそゝぎそふる心地すれば、



残れとて残しも置かぬ筆の跡を、

形見と知らで形見とぞ見る。

いでや光異なる玉の聲は、うづもれぬ名と共に後の世までも  
聞えて傳はらむものから。

### 五 縣居翁の墓參會に

おのれ人に異なる一つの癖ありて、つねに夢見る事をおもし  
ろみ、夢見る事を樂しむ。しかはあれど、よき夢見たりとて人に  
誇り語らむともおもはず、悪しき夢見しとて夢ときにあはせ  
て物にかへうつさむともせず。おもしろむしるしにや、ぬる夜  
として夢見ぬ夜なく、樂しむからにや、はかなき事らもよく心  
の底に覺えて忘れず。如何なればおもしろく、如何なれば樂し

きぞといふに、夢といふものは思ふ心より見るとはいへど、い  
とゆくりなき事をのみ見て、思はぬ野山にもさまよひ、知らぬ  
昔人ともむつ物語し、或はをかしき事、或はおそろしき事、或は  
苦しき事、昔かと思へば今、今かと思へば昔、げにうつゝなきも  
のになむある。さはいへ、夢といふもの絶えてなからましかば、  
夜はたゞ徒にいねたるのみにして死せるに等しかりなまし。  
よしや、はかなき夢心地にもせよ、是を見て忘れず、是を見て樂  
しまば、いねし程も起きゐたらむ心地して、五十年の命も百年  
の齡に思ひ比べられぬべし。徒に死せるが如きに勝らじやは。  
おのれが夢好みは、この思ふ心ありての事なりけり。まことや、  
いにし世を忍び、過ぎゆける昔を思ひ出づれば、すべて何かは  
夢ならぬ。悔しく過ぎし昔物語は、とり返さむにもよしなく、語



り出でむもやくなき事ながら、おのれいと若くて二十に三つ四つたらぬ程より、錦織の屋のあやなる手振に思をかけ、芳宜園の色なる言の葉を心に染めて、晨夕べに馴れむつび聞えて、古事學びの事ら問ひものしたるに、二人の大人おしだち、常にともすれば、縣居の翁の世にいまそかりし折の事うち語り聞かせられて、よろづたゞ夢のやうに覺ゆるは、など慕ひ聞えられしが、其の二人のぬし達も今は世におはせずして、その語り聞かされし折の事らも、また五年十年の昔語となりたり。おのれ才拙く心たましひたゞはしからで、學びの常に愚なれども、幸に二人の大人だちになれ親しみて、翁の昔語を聞けり。其の翁の昔語を耳に留め、二人の大人だちの世にいまそかりし晨夕べを目に忘れずあれば、翁のとありし節、二人の大人だちのか

かりしすさみを、事に觸れては思ひ出でて、かつ慕ひかつ懐かしむ。これ亦おもしろく樂しき夢物語ならずや。あはれ今この御寺に、翁のおくつき詣するも、年毎の恆例のやうになりて、九年十年餘り四年にもなりぬ。星移り月變らば、今も亦後の世の夢物語となりなまし。今年も例の人々と共に此のおくつき詣すとて、豫めことがきを設けて、「いにし事らは夢の如くなり」といふ事を、歌や言葉やと、人もよみ吾も作らむとするに、始にいへるおのれが夢好みの癖思ひよそへられて、はかなきそゞる事しもいひ續けられたるなりけり。

山寺のこけの筵に旅ねして、

ふりし世しのぶ夢がたりせむ。



閑田文章 (伴蒿蹊)

一 春の曙

鶏の八聲もわきて花やかに聞きなされて、年立ちかへる空の光は岩戸のひま見え初めし昔もかくやと心浮きたつなむ、若き時にはかはらぬやう／＼きさらぎとなりては、野山の梅咲きいでぬらむ、川そひ柳も緑ならむ、明けはてばとく霞を分け、てなど思ひて、鶯の啼ながらの聲待つ程の心地また樂し、まいて花よりしらむ彌生の山のながめ、後にや風のうさも知られむ」と聞えし散りがたの景色など、これがために旅寝せし處々も思ひいでぬる折は、魂も身にそはずこそ。

後にや風の云々  
續古今集、霞  
みつ、花散る  
嶺の朝ぼら  
け、後にや風  
のうさも知ら  
れむ。」

二 冬のころ

花咲き實なりし木も紅葉をかぎり、に冬がれ、木の芽はるさめも時雨にかはり、それも何時しか染めぬべきもの無くなりぬれば、みぞれにうつりて雪と積る。一とせの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪うなる子が、大人しくなりぬと言はれしなむ、やがて老の始にて、終に髭髪白くなりぬるをしも、つく／＼と思ひ較べて、埋火のもとにのみうづくまるを、若き人はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。少壯いくばく時ぞ、老をいかに。」とから歌にも聞ゆるを、徒に朽ちはてぬること、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒。てふこともあり。かれにな習ひたまひそ。冬は年の餘ともいふを、この頃の雪をあつめ、ながき夜を空しくな寝ね給ひ

隙行く駒  
莊子、知北遊  
篇、人生天地  
之間、如白駒  
之過隙、忽然  
而已。」

少壯いくばく時  
ぞ  
前漢武帝の秋  
風辭、歡樂極  
兮哀情多、少  
壯幾時兮奈老  
何。」  
前の車の云々  
童子教、前車  
之見、覆後車



之爲<sub>レ</sub>誠。』  
年の餘  
魏略、冬者歲  
之餘、夜者日  
之餘、陰雨者  
時之餘。』  
老いては云々  
後漢の馬援  
傳、「少有<sub>二</sub>大  
志<sub>一</sub>、嘗謂<sub>二</sub>賓  
客<sub>一</sub>曰、丈夫爲  
志、窮當<sub>二</sub>益  
堅<sub>一</sub>、老當<sub>二</sub>益  
壯<sub>一</sub>。』

そといはまほし。老いてはますく、壯なるべし。」と勇みし人は、  
おのがたぐひにあらず。たゞ寒きに堪へねば、ひたやごもりに  
こもる程に、睡も宵よりきざして、しかも夜深くは目さめぬ。冬  
もうし、老もうし。こは老の心をうつすとやいはむ、冬の心をう  
つすとやいはむ。

### 三 枯野の霜と庭の落葉といづれか

哀なるといふあげつらひ

老いぬれば去年一昨年と思ふことも今は七とせ八とせにな  
りぬるものをなど人は笑ふめりか。れば年のうちの春秋は  
たゞひと日ひと夜のこゝちこそすれ。梅櫻あらぬ木どもも花  
咲き青葉茂りしは夢と醒めて、かならず人を待つとなけれど、

踏みわけ難き庭の木の葉にもよほされて、涙さへ脆く落つる  
よ。またさりあへぬことにつきて田舎へ行くとして、朝ぼらけに  
立ちいでて見れば、あばらなる野守が庵の軒端には、雪かとも  
たどるばかりの霜の、さらでだに力なげにかじけたる尾花お  
し伏せたる、又むせる栗のごと見えし女郎花も、今は黒みに黒  
みて、朽ち倒れたる上の眞白なるは、みつわぐむ老媪の宮つか  
へせし昔忘れず、今日は祝ふ日なりなど言ひて、ことさらにう  
ちけはひたるさまに似たりや。そが中にふぢばかまの交りて、  
枯れながらさと吹く風にかをりたるなむ、たきものの名残覺  
ゆるも中々なり。まいてこれらの蔭をたのみて、かしがましき  
まで聲たてし蟲どもの、からをだに見せず、この下に朽ちはて  
ぬらむかしと思ふも悲し。宿ながら見し庭のさまもあれど、野



邊のあはれは、とりあつめていはむかたなくこそ。

#### 四 學 論

ある人問ふ。もの學ぶは何の爲ぞ。答ふらく、人の道をよくし、はた智をみがくなり。曰く、人の道といへば、親に孝あり、妻子はらから睦まじくて身を修むるの外あらめや。それ文學びずとてよくせずもあらず。はた智をみがくは世を治め、民を導く人こそあらめ。我が身のごときは却りて智といふものの禍して、よしなきことに心を悩ますもあるべし。凡そ物學ぶ人を見るに、身を修むることは却りて世なみにも及ばず、なすべき業を懈りながら、己が智を恃みて人を見くだすからに、人にも疎まれて身を立つるよしなきもあり。いかにぞ。答ふ。ほど／＼につけ

葵だにも云々  
曹植の文に、  
「葵藿之傾葉  
太陽雖不爲  
之回光、終  
向之者誠也。」

て人の道を守ることとは、人なるからにもの學びずとてえせずしもあらじなれど、よくすることは賢き人もなほ病めりとかや。さればいたらずとも、あはれよくしてしがなと努むるは物學ぶ人のもとの志なるべし。さるを學びながら大かたの人にも及ばぬは、もとの志よからず、あるは才にほこらむがため、あるは利を射むがために謀るものか。そはその人の罪にして、學びの罪にはあらず。智をみがくとは、我かしこしとかまへて心を悩まし、人をも侮るごとき世なみの智をいふにはあらず。おのが私に勝つべきまことの智をいふ。君子の家國を治むるはもとよりなり。たゞ人と雖も智晦ければ行きまどひ、悪しき道にひかるべければ、おのれを守らむためにみがくなり。葵だにもなほよく廻りて日あしを衛る。となむ昔の聖も宣へりき。



おこなひのいと  
まある時云々  
論語、子曰、  
弟子入則孝、  
出則弟、謹而  
信、汎愛衆、而  
親仁、行有餘  
力、則以學  
文。」

文をもて友を集  
論語、「曾子  
曰、君子以文  
會友、以友  
輔仁。」  
文は道を貫くの  
器  
李漢の韓昌黎  
集序に、「文者  
貫道之器、不  
深於斯道、不  
有至焉者不  
也。」

なべての世を見るに、うからやからは睦まじくあるべきさま  
に身を修むるよと見る人も、常ならぬ憂きふし出でくれば、お  
もひの外に淺ましき振舞をあらはすもあり。そは仁といひ義  
といふ則もうかゞはず、いにしへ今のためしをも知らざるに  
罪す。あやふからずや。」といへば、客人うなづくものから、再び言  
ふ。さらば學びはものの理をよく知るにて足りぬ。何ぞ言のあ  
やをなし、文よ詩よと巧を費すことをせむ。此の言のあやにひ  
かれて、彼の才にはほこり、身をあやまつ人も出でくらむかし。」と。  
答ふ。そは「おこなひのいとまある時文を學ぶ。」とも見えたれば、  
實を措いて花を食へとはあらず。されば「文をもて友を集へ、  
友をもて仁を輔く。」とも、「文は道を貫くの器。」ともあれば、花と實  
と離るべからず。同じ言もあやといふものなければ、聞く人の

心にとゞまらず、後にも傳ふべからず。されば道を載せたる四  
書・五經も言のあやめでたきぞかし。今まさに汝が心に問へ。つ  
ぶくといひてはさしもなきことも、やまと歌から歌に連ぬ  
れば、心にしみて涙も落つるにあらずや。もとより本草に花あ  
り、鳥蟲の音にあやあり、人として本草鳥蟲にもおとらむや。」と  
いへば、客人再びうなづきて退きぬ。

五 大森求古の故國に歸るに寄す

あめつちの間にありとあるもの、みなおのづからにうけえたる  
所あり。いまたゞ一つ鳥のうへもていはむに、本草の實を喰  
ふべきものと、這ふ蟲を喰ふべきものと、嘴のやう異にて相通  
はぬあり、かれこれを共に喰ふべきあり。相羨むとも叶ふべか



らず、いかにともせむすべなかるべし。しかはあれど、口あれば  
喰ふべく、肩あれば着るべし。肩ありて着ず、口ありて喰はざる  
は誰があやまちぞ。上が上より下が下まで、身のほどくにつ  
きて世のわたらひをなすべきための心ばせといふものあり、  
手足あり。これはたかの嘴のごと天の與ふる所にして、意を用  
ひて手足を休むるもあり、手足を動かして意を用ひざるもあ  
り。ともに働かすべき際もあらむ。さればうけえたる所のまに  
まに、士農工商おのれくが業を守らひ勤めなば、まどしとて  
も飢ゑこゆるには及ばず。木つゝきの木の裏の蟲を求むる  
には足らじを暮ると明くとに怠りながら幸福をもとむる人  
は、木によりて魚をもとむるにもたぐふべくなむ。こゝに男資  
規の交を結びし求古ぬし、年ごろ都に遊びながら志を得ず事

たがひのみゆくに、近き年となりて故郷のうからはらから皆  
ほろびて、家を繼ぐべき人なければ、しひて歸り給はむことを  
催す人あるからに、力なく出で立たむとし給ふに臨みて、何に  
まれ心の守になるべき言を述べてよ。と求め給ふ。おのれもと  
よりざえ拙きがうへに、老のならひのもの忘草こゝろに繁り  
て、ふつにいふべきことを知らず。しかはあれど、送るに言をも  
てすなるは古のよしとする所なれば、黙もえあらで、言古りに  
たれど、易きにおて命を俟ち、身を懈らずつとめ給はむことを  
すゝむ。かからばその家をおこし給はむも難きにあらじ。はた  
年月都に馴れて、故郷ながら鄙の住居のものうからむもさる  
ことなれど、こもまた何か。あめに月あり、つちに花あり、四つの  
時のうつりかはるおのづからの景色をたのみて、心をのばへ



弛めて張らざる云々

禮記、「張而不弛文武弗能也。弛而不張文武弗爲也。一張一弛文武之道也。」

弛、弛也。張、張也。弛而不張、弛而不弛也。文武、文也。武也。弗、不也。爲、爲也。一、一也。張、張也。弛、弛也。文武、文武也。道、道也。

給へや。

よしやゆけ、みやこも鄙もこゝろだに、

やすくしへなばやすからむ世を。

又弛めて張らざる文武はせず、張りて弛めざる文武はあたはず。」といふことをおもひて、

一つきの酒におもひをやりてまた

なすべきわざはよくつとめてよ。

といふは、享和改元春三月なり。

### 檀園文集 (中島廣足)

#### 一 出塵樓の記

馬場貞雄が住める家は、もとよりこの岡のつかさなるを、こたび改めしつらひて、その名をおのれに請へるにより、やがて出塵樓とつけぬ。さるは市町の中にあれど、その本つ家よりは造り放ちて、やゝ奥まりたれば、世の塵のけがしさは、目にも耳にもふれざめり。かくてその望のすぐれたることは、皆人のまのあたり見わたすがごとくにて、沖の島々、入江のくまぐま、數へあげても、のせむには、言の葉も足るまじくなむ。また四つの時のさまぐなる中に、春の花はをちこちの山々に見わたし、時鳥は入江をこえて軒端に來鳴くを聞き、秋の月は風清き波の



上に玉しきみだすを眺め降りつむ雪はうち向ふ稻佐の高嶺  
にめではやして心をやり思をのばへぬべし。しかのみならず、  
百舟千舟漕ぎきほふ中に、唐土のは年に再び行きかよひ、赤え  
みしのは夏の末つ方に入り来て、秋果つるほどに歸れるなど、  
その出入のよそひのさかりなることは、瓊浦のいみじき光に  
て、この家のまたなき見ものなりけり。家あるじもとよりみや  
びわざを好みて、同じ心の人々をつどへ、歌おもひのまとゐし  
ばくゝなるは、まことに市中にして世をはなれ塵を出でたる  
住家になむありける。さればそのよし一くだりものしてよと  
あるに、嘉永の初の年のみな月二十日あまり七日の日にしる  
す。

## 二 讀書の樂

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、  
書見る心の樂しさになむありける。さるは道々しきすぢのは  
更なり、家々に記せる何くれの書、又假初の筆ずさびなど、唐大  
和、古今といとさまざま、多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、  
見もてゆくまゝには、えうあることどもありて、かにかくにあ  
かずおもしろく樂しきは、書にしくものまたなかりけり。遠き  
世のを見るほどは、われもその世にある心地して、やがてその  
人々を友となしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆  
とりてよしなしごとども書きつくるが、たま〜もちりぼひ  
残りて後の世に傳はらば、今の古を見るが如く、後の人はた我  
を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとを



かしくなむ覺ゆる。萬づの心やれるわざ、いとさはなれど、たゞ  
一人居てあかず樂しきは、書のほかに又何かはあらむ。あるが  
上にもあらまほしきは書なりけり。」と、鈴屋の翁のいはれたる  
は、げにさることこそ。

三 夕暮の趣

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鳥も、いつしか聲しづまり  
て、向へる文卷もやうく見えずなりゆくに、心ゆくわたりは  
いと口惜しきものから、暫しうちおきて端の方に出づれば、暮  
れのこれる梢どものほのかなる山の端に、はつかにあらはれ  
たる三日月の影こそ、いとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥のあ  
やしき聲になきゆくが、何となくもの淋しげなるを、來むとい

ひつる友は、た暮れすぐしてやと思ふも、心もとなきに、ともし  
火かゝげたるこそまづ嬉しけれ。

四 夜學の樂

寺々の初夜の鐘、ひゞきもをさまりて、皆人も寝たるに、いと  
れしう、ともし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじ  
う心すみて、晝見たりしあたりの何心なくて、過ぎにしも思ひ  
知られて、ふかき心ばへあるくだりくも、おのづから解き得  
らるかしか、かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしそ  
へつゝ、見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地  
す。冊子つくりてをかしきふし、あるはふと思ひ得たるこ  
となどをば、墨おしずりつゝ、書きつけなどするもをかし。鳥の



聲は夜深トモシヨきにやと思ふに、いととく明あけはなれたる、しばしとてうちねぶる夢ゆめのうちも、あだしごとあだしごとならむやは。

夜半の夢のうらみ

### 五 山家の興

山里のすまひは淋しみしきやうなれど、さる方かたになれぬれば、なかなかにをかあしうなむ。さるは花紅葉はなこうじの色香いろかほは更さらなり、鳥蟲とりむしの聲こゑにつけても、自ら心こゝろを慰なぐさむるくさはひ多く、松まつの柱はしら竹たけの編戸あはだ、小柴垣せうさいがきゆひめぐらしなど、萬よろづづの調度てうどさへいたうことそぎて、庭にわなどもたゞ自らなる巖いわのたゞずまひ、軒のき近く滴たる水みづを古木ふるきのうつぼめく物ものにうけたためたる、飯炊いひかぐにも手洗てあらいふにも、たゞこの水みづにて事こと足りぬ。まれく訪まひ來きる人ひとはたあるじまうけなどいふこともせず、蕨わづ土筆つちすゐ、筍たけのこ、野老のらなどの折まりに従したがひ所ところにつけた

住すままであはれば  
新古今集しんきんしゅう山やま  
深ふかくさこそ心こゝろ  
は通とほふとも、  
住すままであはれ  
は知らむもの  
かは。

る物ものして、手づから造つくれる白酒しろ酒すゝめなどす。同じき物語ものがたりも、人ひとぎゝ、憚おそるべき事ことしなれば、心こゝろに残のこすくまもなく、ゑひすゝみぬれば、やがてうちつれつゝ、たゞさながらなる打解うちげ姿すがたにて、そこはかとなくあくがれありきなどするも、住すままであはれば、とかいひけむやうに、またなく心こゝろゆきて、命いのちものぶるやうになむ。

### 六 漁村のさま

海人うみびとの住家すまばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊うみべの風かぜもたまらぬ松蔭まつかげなどに、たゞかりそめに造つくりたる藁屋わらやどものさま、波なみうちよせなば、やがて流れも失うしなせぬべう、いとはかなげに見みゆるを、繪えに書かきすさびたるなどは、なか／＼にを







のから、さのみ漕ぎ返したらむには、え堪ふまじくやと思はるるを、あなにくの船人や、徒に人を走らせて。と腹あしげにいひたるこそ心地なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間遠くさし分けゆくを、彼方の岸にも待遠なるけしきにたはずみたる人あり。水上よりさし下す筏のさまのいと静かなるに、中洲のわたりには、小さき舟繋ぎて四手とかいふ網さしおろして、とかくするなどいとをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。後れたる人々、つぎ／＼來あひてたち待つほど、やうやう漕ぎもて來たるこそうれしけれ。

八 春の雨

花盛はさらなり。さらでも柳など青やかにうち煙り、うら／＼

と照りたる日は、蕨土筆などいかならむと、野山のさまのみこひしう思ひやられて、庵の中には籠り居難きを、人さへゆくりなく訪ひ來つゝ、近きわたりまでいざ／＼などそゝのかすめり。雨の降る日はさることも思ひ絶えて、人はた音づねば、文机にのみよりゐたる、なかく／＼にをかしうなむ。萱ふける軒は雨の音静かにて池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どものそこはかどなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今一際、心しみぬ。風少し吹きいでて、燈臺の火の瞬きたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。



②

九 蚊遣火

晝のほどの暑けさは水さへむとくにて、いと耐へ難かりしを、  
やうく日影も傾きて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼  
しきに、ゆあみなどして立ちいづれば、月の影さへほのめきて、  
晝の苦しさもかつぐ、わすられぬや、遠くゆくほど、道の傍  
なる賤がふせ屋より烟のいとしげくたち上るは、蚊遣ふすぶ  
るにやと思ふに、大きな火桶に何にかあらむ青やかなる木  
の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたにあふぎちらすは、  
いとあつかはしく、見る目もいぶせて、急ぎ歩みすぎて見れ  
ば、やうく薄らぎゆくけぶりの杉の梢にたなびきたる、霞お  
ぼえてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪に  
も書かまほしき景色になむ。

一〇 夏の旅

晝のまは暑さ堪へがたくて、はかなくしうもえあゆまねば、朝  
影の程にこそはとて、鳥の聲とともに起きいでて行くに、有明  
の月隈なく澄みわたり、竝木の松風涼しく吹きとほりて、ほろ  
ほろとこぼる、露の袂にかゝれるもいと心地よし。道のかた  
へなる田の面に人の音なひのするを、何にかと見れば、車の上  
に登りゐて水踏み入る、なりけり夜さへかゝる業するはい  
かばかり苦しからましと思ふに、我が旅のうさも聊か慰みぬ。  
程なく明けゆく横雲の空に山鴉飛び渡りつ、茅蜩の鳴きい  
でたるなど、いみじうをかしきに、稻葉の露の所せきまで置き  
渡したるが葉末に上りてかつぐ、こぼる、さま見る目もい



少納言  
枕草子の著  
者、清少納言  
のこと。

と涼しくおぼゆ。さし出でたる日影のやうく、高くなりゆく  
に、けふ越ゆべき某の山路思ひやるも、まづいと苦しうこそ。

一一 埋火

いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづ  
きし。と、少納言の筆すさびに物せられたる、げにさることにて、  
冬はたゞこれのみぞ、まらうどのあるじまうけにもなりぬめ  
り。雪降り積みたる日、かねてちぎりしを訪ふに、思ひしもしる  
く、南面清くはらひて、簾高く捲きあげたり。大きやかなる火桶  
のよきほどにうづめたる火に、やがてさし向ひたる心地、いみ  
じううれしく、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。今もうち  
散るを見つ、何くれの物語するほど、なほ炭をと、て取りいで

折り焚くべき紅  
葉  
白氏文集、林  
間、酒焼、紅  
葉、石上題詩  
拂、綠苔。

たる、手づからさしそふるもをかしきに、酒肴もていで、折り  
焚くべき紅葉もなかめるを、やがてこれにて煖めてこそは。と  
いふに、雪の寒けさもかつぐ、忘られてなむ。

一二 冬の月

思ふどちまどおして、うづみ火かきおこし、酒煖めつ、物語す  
るに、いつしかさゆる夜のけはひも忘られて、窓の戸おしあく  
れば、宵の浮雲なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に、月のさ  
やかに照りたるが、いはむ方なくおもしろきを、かくてのみや  
はあるべき、徒に寝て明すらむあたりをも驚かしてむと、やが  
てうち連れつ、あくがれ出づ。人の行きかひも絶えたる大路  
の、凍りわたれるを踏みならず足音、我ながらいとをかしくお



かゝる月夜をしもすさまじ云々  
徒然草「すさまじきものに  
して見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心細きものなれ。」とあるをさす。  
興盡きて反る  
晋書、王徽之傳、「木乘興而來、興盡而反、何必見安道耶。」

もほゆかゝる月夜をしもすさまじといひけむ昔の人こそ心えね。などいひしろひつゝ、や、遠くあくがるゝに、風のいとさむく身にしみて堪へがたければ、興盡きて反る。といへる故事もあなるものをとて、おのゝたち歸るに、夏ならましかば、なほいづこまでかはあくがれなましと思ふも、いとをかしくなむ。

玉かつま (本居宣長)

一 縣居のうしは古學のおやなること

からごゝろを清くはなれて、もはら古のこゝろ詞をたづぬる  
學問は、わが縣居の大人よりぞはじまりける。この大人の學びのいまだ興らざりしほどの世の學問は、歌もたゞ古今集よりこなたにのみとゞまりて、萬葉などはたゞいと物どほく心も及ばぬ物として、さらにその歌のよきあしきを思ひ、舊き近きをわきまへ、又その詞を今のおのが物としてつかふ事などは、すべて思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言をおのがものとして、萬葉ぶりの歌をもよみいで、古ぶりの文などをさへ書きうることとなれるは、もはら此の大人の教のいさをに

縣居の大人  
賀茂真淵のこ  
と。



ぞありける。今の人はたゞおのれみづから得たるごとと思ふめ  
れど、みな此の大人の御蔭によらずといふことなし。又古事記  
書紀などの古のみ書をうかゞふにも、漢意にまどはされず、ま  
づもはら古言を明らめ、古意によるべきことを、人みな知れる  
も、この大人の萬葉のをしへのみたまにぞありける。そもく  
かゝるたふとき道をひらきそめられたるいそしみは、よにい  
みじきものなりかし。

## 二 古書どものこと

めづらしき書をえたらむには、親しきも疎きも同じこゝろざ  
しならむ人には、かたみにやすく貸して見せもし、寫させもし  
て、世にひろくせまほしきわざなるを、人には見せず己ひとり

見て誇らむとするは、いとく心ぎたなく、物學ぶ人のあるま  
じきことなり。たゞし、えがたき書を遠くたよりあしき國など  
へ貸しやりたるに、あるは道の程にてはふれうせ、あるはその  
人にはかになくなりなどして、つひにその書返らずなるこ  
とあるは、いと心うきわざなり。されば遠きさかひより借りた  
らむ書は、道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命にはは  
かなること、計りがたきものにしあれば、なからむ後にもは  
ふらさず、たしかに返すべくおきておくべきわざなり。すべて  
人の書をかりたらむには、すみやかに見て返すべきわざなる  
を、久しくとゞめおくは心なし。さるは書のみにもあらず、人  
かりたる物は、何もく同じことなるうち、いかなればにか、  
書はことに用なくなりて後、なほざりにうち捨ておきて、久



しく返さぬ人の世に多きものぞかし。

### 三 新なる説につきては

近き世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひさとく  
かしこくなりぬるから、とりくに新なる説をいだす人おほ  
く、其の説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべて  
の學者いまだよくもとのほぬほどより、われおとらじと世  
にことなるめづらしき説を出して、人の耳を驚かすこと今の  
世のならひなり。其の中には、ずるふんによるしきことも稀に  
はいでくめれど、大かたいまだしき學者の心はやりていひ出  
づることとは、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かるくしく  
まへしりへをも考へ合さず、思ひよれるまゝにうち出づる故

かへし  
かへし  
かへし  
かへし  
かへし

に、多くはなかくなるいみじきひがごとのみなり。すべて新  
なる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よ  
くたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほり  
てたがふ所なく動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじ  
きわざなり。その時にはうけぱりてよしと思ふも、ほどへて後  
にいま一たびよく思へば、なほわるかりけりと我ながらだに  
思ひならるゝ事の多きぞかし。

### 四 新しき説を出すは

大かたよのつねにことなる新しき説をおこす時には、よきあ  
しきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者に憎まれ譏らる  
るものなり。あるは己がもとより來つる説といたく異なるを



聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶ  
るに捨ててとりあげざる者もあり。あるは心の中にはげにと  
思ふふしもおほくあるものから、さすがに近き人のことに従  
はむことのねたくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬ顔  
して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心には  
よしと思ひながら、その中の疵をあながちに求め出でて、すべ  
てをいひつけたむとかまふる者もあり。大かた古き説をば十が  
中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わ  
づかに二つ三つの取るべき所のあるを取りたてて、力のかぎ  
り助け用ひむとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つ  
のわるきことをいひたてて、八つ九つよきことをもおしけ  
ちて、力のかぎりは我も用ひず人にも用ひさせじとする、こは

大かたの學者のならひなり。然れども又まれには、新なる  
説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやか  
に改め従ふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひ  
て、かくはあらかじかとはまでは思ひよれども、みづから定むる力  
なくて、疑はしながらさてあるなどは、新なるよき説を聞きて  
は、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちに従ふだ  
ぐひもありかし。大かた新なる説は、いかによくともすみやか  
には用ふる人稀なるものなれど、よきは年をへてもおのづか  
らつひには世の人の従ふものにて、あまねく用ひらるれば、そ  
の時にいたりては、はじめにねたみそしりしともがらも、心  
は悔しく思へど、おくれればせにしたがはむも、猶ねたく人わろ  
くおぼえて、こゝろよからずながら、古きをまもりてやむとも



がらも多かり。しか世の中の論定まりて、皆人の従ふ世になり  
ては、始よりすみやかに改め従ひつる人は、かしこく心さしく  
おもはれ、古きにかゝづらひて、とかくとこほれる人は、心お  
そくいふかひなく思はるゝわざぞかし。

五 おのが物學びのさま

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむよるづ  
よりもおもしろく思ひてよみける。さるははかしく、しく師に  
つきて、わざと學問すをにもあらず。何と心ざすこともなく、そ  
のすぢと定めたるかたもなく、たゞ唐の大和のくさぐさの  
書、あるにまかせ、うるにまかせて、古き近きをもいはず、何く  
れとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よまゝ、ほしく

改観抄  
附契沖の著、  
百人一首を解  
の。釋したるも

思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて  
學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよ  
み出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、か  
たのごとく今の世のよみざまなりき。かくてはたちあまりな  
りしほど、學問しにとて京になむ上りける。さるは十一のとし、  
父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへ  
に失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしの  
わざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせむとてな  
りけり。  
さて京に在りしほどに、百人一首の改観抄を人にかりて見て、  
はじめ契沖といひし人の説を知り、そのよに勝れたるほど  
をも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄勢語臆斷など



餘材抄  
古今和歌集を  
註釋したるも  
の。  
勢語臆斷  
伊勢物語を註  
釋したるも  
の。

冠辭考  
賀茂眞淵の  
著、枕詞を解

をはじめ、その外もつぎ／＼にもとめ出でて見けるほどに、す  
べて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう／＼にわ  
きまへさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、  
大かた心になはず、その歌のさまをかしからずおぼえけ  
れど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみ  
に、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ、よみありきけ  
り。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、お  
のがたててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はと  
がめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてむ。  
さて後國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の、近きころ  
出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居大人の  
御名をも始めて知りける。かくて其の書はじめに一わたり見

釋したるも  
の。  
縣居大人  
賀茂眞淵。

しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠くあ  
やしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶  
あるやうあるべしと思ひて、立ちかへりいま一たび見れば、ま  
れ／＼にはげにさもやとおぼゆるふし／＼も出できければ、  
又立ちかへり見るに、いよ／＼げにとおぼゆること多くなり  
て、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりの  
こゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひ  
くらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみ  
ぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのご  
とくなりき。  
さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、  
古き近き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどよ







古言をえたるうへならではあたはず。古言をえむことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉を明らめむとするほどに、すでに年老いて殘のよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ學びなば、その心ざしとぐることもあるべし。たゞし世の中のもの學ぶともがらを見るに、皆ひき、所を経ずて、まだきに高きところののぼらむとする程に、ひき、ところをだにうることをあたはず、まして高き所はうべきやうなれば、みなひがごとのみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづひき、所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはら

このゆゑぞ、ゆめしなをこえて、まだきに高き所をな、のぞみそ。いとねもごろになむ誠めさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとくおぼえけるまゝに、いよく萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのこゝろ詞をさとりえて見れば、まことに世の物識人といふものの神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになむ有りける。

### 七 師の説につきては

おのれ古典を解くに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心



にて、常に教へられしは、後によき考の出で來たらむには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ。となむ教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古を考ふる事、さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ盡すべくもあらず、又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなどかなからむ。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのことごとく明らかなり、これをおきてはあはるべくもあらずと思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を経るまに、さきぐのうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎくにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしき

をいはず、ひたぶるに古きをまもるは、學問の道にはいふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることもなし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、つゝみかくして、よさまにつくるひをらむは、たゞ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむ事を思ひ、古のことの明らかならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりの缺けむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと譏らむ人は、譏りてよ。そはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわ



が師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

### 八 教子にさとす

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考の  
いできたらむには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしきゆるを  
いひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明  
らかにせむとなれば、かにもかくにも道をあきらかにせむぞ。  
吾を用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊ま  
むは、わが心にあらざるぞかし。

### 九 富貴につきて

世々の儒者身の貧しく賤しきをうれへず、富み榮えを願はず  
喜ばざるをよき事にすれども、そは人のまことの情にあらず。  
おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれ／＼にさる心  
ならむ者ありとも、そは世のひがものにくそあれ、なにのよき  
事ならむ。ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はむ  
こそはあしからめ、ほど／＼に務むべきわざをいそしく務め  
て、なりのぼり富み榮えむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。  
身おとろへ家貧しからむは、うへなき不孝にくそありけれ。た  
だおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝を忘  
るゝは、もろこし人のつねなりかし。

### 一〇 一むきにかたよることの論ひ



世の物識人の、他の説のあしきをとがめず、一むきに片寄らず、  
これをもかれをも捨てぬさまに論をなすは、多くはおのが思  
ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとす  
るものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいか  
に譏るとも、わが思ふすぢをまげて従ふべきことにはあらず。  
人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきに  
片寄りて、他説をばわろしとがむるをば、心せばくよからぬ  
事とし、一むきには片寄らず、他説をもわろしとはいはぬを、心  
ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、  
必ずそれさしもよき事にもあらず。據るところ定まりて、そを  
深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それにな  
がへるすぢをば取るべきにあらず。よしとしてよる所に異な

るは、皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわり  
ぞかし。然るを、これもよし又かれもあしからずといふは、よる  
所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さ  
だまりて、そを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあし  
きことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずる  
ところを信ずるまめごゝるなり。人はいかにもおもふらむ、わ  
れは一むきにかたよりて他説をばわろしとがむるも、必ず  
わろしとは思はずなむ。

### 一一 前後の説のかはること

同じ人の説の、こゝとかしことゆきちがひて、ひとしからざる  
は、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説す



べて浮きたるこゝちのせらるゝそは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。始より終まで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事のほどへて後に又異なるよき考の出でくるは、常にある事なれば、始とかはれることあるこそよけれ。年をへて學問すゝみゆけば、説は必ずかはらでかなはず。又おのが始の誤を後に知りながらは、つゝみかくさで清く改めたるもいとよきことなり。殊にわが古學の道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことごとくは考へつくすべきにあらず。人をへ、年をへてこそ、つぎつぎに明らかには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、前なると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の

生のかぎりのほどにも、つぎつぎに明らかになりゆくなり。されば、その前のと後のとの中には、後の方をぞ其の人の定まれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ始のをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ始のかたよろしくて、後の中々にわろきもなきにあらざれば、とにかくに、えらびは見む人の心になむ。

### 一一一 花のさだめ

花はさくら。櫻は山櫻の葉あかくてりてほそきがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山ざくらといふ中にもしなぐのありて、こま



有りて世の中  
古今集、残り  
なく散るぞめ

かに見れば、一本ごとにいさゝかかはれるところありて、また  
く同じきはなきやうなり。又今の世に、桐がやつ八重一重など  
いふも、やうかはりて、いとめでたし。すべて曇れる日の空に見  
あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も青やかに茂りた  
るこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよく晴れたる  
日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花  
ともおぼえぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。梅は紅梅。ひ  
らけさしたるほどぞ、いとめでたきを、さかりになるまゝに、や  
う／＼白けゆきて、見どころなくなるこそ、いと口惜しけれ。櫻  
の咲けるころまでも、散ること知らず、むげに匂なくねびれし  
ぼみて残りたるを見れば、げに有りて世の中は、何事もみなか  
くこそと、見る春ごとに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそ

でたき櫻花、  
ありて世の中  
はてのうけれ  
ば。

あれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝を物に  
さして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。桃の花はあま  
た咲きつゞきたるを遠く見たるはよし、近くては鄙びたり。山  
吹かきつばたなでしこ萩すゝき女郎花など、とり／＼にめで  
たし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ、あまりうるは  
しくしたゝかにつくりなしたるは、なかく／＼に品なくなつた  
しからず。つゝじ、野山に多く咲きたるは、目さむるこゝちす。か  
いどうといふもの、からめきてこまやかにうるはしき花なり。  
そも／＼かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ、人は又思  
ふ心ことなるべければ、一やうに定むべきわざにはあらず。又  
いまやうの世の人のもてはやすめる花どもも、世におほかる  
を數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみた



らず古き物にも見えたることなきは心のなしにやなつかし  
からずおぼゆかし。されどそれはたみとやうなるひが心にや  
あらむ。

一三 手書くわざ

萬づよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問など  
する人は殊に手あしくては心おどりのせらるゝを、それ何か  
は苦しからむといふも、一わたり理はさることながら、なほあ  
かずうちあはぬ心地ぞするや。宣長いと拙くて、常に筆取るた  
びにいと口惜しういふかひなく覺ゆるを、人の請ふまゝに、お  
もなく短冊一ひらなど書きいでて見るにも、我ながらにいと  
かたはに見苦しうかたくななるを、人いかに見るらむと恥か

しく胸痛くて、若かりし程になどて手習ひはせざりけむとい  
みじうくやしくなむ。

一四 物書くわざ

書を寫すに同じくだりのうちあるは並べ行などに同じ詞  
のあるときは、見まがへてその間なる詞どもを寫しもらすこ  
と、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてか  
へしては、その間一ひらを皆がらおとすことあり。これら常に  
心すべきわざなり。又よく似て見まがへ易き文字などは、殊に  
まがふまじくたしかに書くべきなり。これは寫し書きのみに  
あらず、大かた物書くに心得べきことぞ。すべて物を書くは、事  
の意を示さむとてなれば、おふなく、文字さだかにこそ書か



まほしけれ。ざるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、  
いかなることとも読み解きがたきが世に多かる、あぢきなき  
わざなり。常に書きかはす消息文などは、文字読みがたくては  
言ひやるすぢゆき通らず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつ  
つかへさひ讀めども、つひに讀み得ずなどしては、こゝ讀み難  
しと返し問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしは  
かりに心得ては、事たがひもするぞかし。

一五 學びの道の擇びやう

物學びに志したらむには、まづ師をよく擇びて、その教のむね  
をよく考へて、從ひそむべきわざなり。智にぶき人は更にもい  
はず、もとよりさととき人といへども、大かた初に從ひそめたる

かたに、おのづから心は引かるゝわざにて、その道のすぢわろ  
けれど、わろきことをえさとらず、又後にはさとりながら、年  
頃のならひは、さすがに捨てがたきわざなるに、我とかいふ禍  
神さへ立ちそひて、とにかくに強ひごととして、なほそのすぢを  
助けむとするほどに、終によきことはえ物せで、ひがごとのみ  
して、身を終ふるたぐひなど世に多し。かゝるたぐひの人は、勉  
めて深く學べば、學ぶまに、いよく、わろきことのみさか  
りになりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はす  
ことぞかし。かへすくも初より師をよく擇ぶべきわざにな  
む。

一六 道のひめぐと



いづれの道にも、その大事とて世に廣くもらさず、ひめかくす  
事おほし。まことにその道大事ならば、殊に世に廣くこそせま  
ほしけれ。あまりに重くしてたやすく傳へざれば、せばくなり  
て絶えやすきわざぞかし。そもみだりに廣くしぬれば、その道  
かるくしくなることといふなるも、一わたりはことわりあ  
るやうなれども、たとひかるくしくなるかたはありとても、  
なほ世に廣まるこそはよけれ。廣ければおのづから重きかた  
はあるぞかし。いかにおもしくしければとても、せばくかすか  
ならむは、よきことにあらず。まして絶えもせむには、何のいふ  
かひかあらむ。されど近き世に、道々に秘傳口訣などいふなる  
すぢ、多くは道を重くすといふは、たゞ名のみにて、まことは人  
に知らさずて、おのれひとりの物にして、世に誇らむとする私

のきたなき心、又それよりもまさりてきたなき心なるぞ多か  
る。さるたぐひも、もろくのはかなき伎藝の道などは、とても  
かくてもありぬべけれど、うるはしくはかぐしき道には、さ  
ることあるべくもあらず。



一七 山林を住みよしとすること

世々の物識人、又今の世に學問する人なども、みな住家は里遠  
く靜かなる山林を、住みよく好ましくするさまに、のみいふな  
るを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず、たゞ人げ繁  
賑は、しき處の好ましくて、さる世ばなれたる處などは、淋し  
くて心もしをる、やうにぞおぼゆる。さるはまれくにも、の  
して、一夜旅寢したるなどこそは、めづらかなるかたにをかし



くもおぼゆれ、さる處につねに住ままほしくはさらにおぼえ  
ずなむ。人の心はさまざまなれば、人うとく静かならむ處を住  
みよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人もよに  
は多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねに  
さいひなして、なべての世の人の心と異なるさまにもてなす  
たぐひも、中には有りぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情の  
ならひにこそ。

一八 古よりも後の世は

古よりも後の世の勝れること、萬づの物にも多し。その一つを  
いはむに、古は橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世に  
は蜜柑といふ物ありて、この蜜柑に比ぶれば、橘は數にもあら

ずけおされたり。その外、柑子、柚、九年母、橙などの類多き中に、蜜  
柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまされ  
る物なり。この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて、今  
はある物も多く、古はわろくて今のはよき類多し。これをもて  
思へば、今より後も亦いかにあらむ、今にまされる物多く出で  
來べし。今の心にて思へば、古は萬づに事足らず、あかぬこと多  
かりけむ。されどその世には、さは覺えずやありけむ。今より後  
また、物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれ  
ど、今の人事足らずとは覺えぬが如し。

一九 田舎に古のわざ残れること

言葉のみにもあらず、萬づの仕業にも、片田舎には、古さまのみ



〔雅言〕  
やびたることの残れるたぐひ多し。ざるを例のなまざかしき  
心ある者の立ちまじりては、却りてをこがましく覺えて改む  
るから、いづこにもやうく古きことの失せ行くは、いと口  
をしきわざなり。葬禮・婚禮など、殊に田舎には古く面白きこと  
多し。すべてかゝる類の事どもをも、國々のやうを海づら山が  
くれの里々まで遍く尋ね聞きあつめて、物にも記し置かまほ  
しきわざなり。葬祭などのわざ、後の世の物識人の考へ定めた  
るは、なかく唐心のさかしらのみ多くまじりて、ふさはし  
からず、うるさしかし。

## 二〇 田舎に古の雅言の残れること

すべて田舎には古の言残れる多し。殊に遠き國人のいふ言の

中には、おもしろき言どもぞまじれる。おのれ年頃心につけて、  
遠き國人のとぶらひ來たるには、必ずその國の詞を問ひ聞き  
もし、その人のいふ言をも心とめて聞きもするを、なほ國々  
の詞どもを普く聞きあつめなば、いかにおもしろきこと多か  
らむ。近き頃肥後の國人の來たるがいふ言を聞けば、世に「見え  
る」「聞える」などいふたぐひを「見ゆる」「聞ゆる」などぞいふなる。こ  
は今の世には絶えて聞かぬ雅びたる言葉づかひなるを、その  
國にてはなべて「いふにや」と問ひければ、「ひたぶるの賤山がつ  
は皆「見ゆる」「聞ゆる」「訝ゆる」などやうにいふを、少し言葉をもつ  
くろふほどの者は、多くは「見える」「聞える」とやうにいふなり。と  
ぞ語りける。そはなかく、今の世のいやしきいひざまなるを、  
なべて國々の人のいふから、そをよき事と心得たるなんめり。



いづれの國にても賤山がつのいふ言は、よこなまりながらも、  
多く昔の言葉をいひ傳へたるを、人しげく賑はしき里などは、  
他國人も入り交り、都の人なども事にふれて來かよひなどす  
るほどに、おのづからこゝかしこの言葉を聞きならひては、お  
のれもことえりして、なまさかしき今様にうつり易くて、昔ぞ  
まに遠く、中々いやしくなむなりもて行くめる。まことや同じ  
肥後の國の又の人のいへる、かの國にて「ひきがへる」といふも  
のを「たんがく」といふなるは、古の「たにぐ」のよこ訛なるべく  
おぼゆ」と語りしは、誠にさもあるべし。此のたぐひのこと、國々  
になほ聞けること多かるを、今はふと思ひ出でたる事をいふ  
なり。なほ思ひ出でむまゝに又もいふべし。

二一 今の人の歌文ひがごと多きこと

近き世の人の、歌も文も、大方はよろしと見ゆるにも、なほ僻  
事多きぞかし。されどその違へるふしを見知れる人は、た世に  
なければ、たゞかいなでにこゝかしこえんなる詞を使ひ、よし  
めきてよみなし書き散らしたるをば、まことによしと見て、人  
のもてはやし譽めたつれば、心を遣りてしたり顔すめる、いと  
かたはら痛くをこがましくさへぞ思はるゝ。さるにつけては、  
かく言ふ己が物する事も、なほいかに僻事あらむと、物よく見  
知られむ人の心ぞ恥かしかりける。人の僻事、のよく見え分か  
るゝにつけては、我はよく辨へたれば、僻事はせずと思ひ誇れ  
ど、古のこの意を曉り知るすぢは、かぎりなきわざにしあれ  
ば、この外あらじとはいとなむ定めがたきわざなりける。



二二 歌も文もよく整ふは難きこと

近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかすと目とまることは程々にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆるところまじりて、大方瑕なくと、のひたるはをさをさ見えず。これを思へば、後の世にして古をまねぶことはいといと難きわざになむありける。古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも少くなむあれば、まして今の人の、聊かなる瑕をさへに言ひたてむは、あながちなるにやあらむ。されど同じくは、人のいさゝかも難すべきふしませぬさまにこそはあらまほしけれ。よきほどにて心をやるをば、唐土の古の人もよからぬことに言ひおきけるをや。

二三 唐人の親の喪に身をやつすこと

唐土の國の世々の物識人どもの、親の喪に身のいみじくやつれたるを、孝心深き事にして記したるが數多ある中には、眞に心の悲しさはいとさばかりもあらざりけむを、食物をいたく減らしなどして、瘦せさらばひて、ことさらに面容をやつして、いみじげにうはべを見せたるが多かりげに見ゆるは、例のいとくうるさきわざなるを、いみじき事に褒めたるも又をこなり。失せにし親を、まことに思ふ心深くば、己が身をも、さばかりやつすべきものは、身のやつれに病なども起りて、若し圖らず亡くなりなどしたらむには、孝ある子といふべしやは、たとひさまでは至らずとも、しかいみじくやつれたらむをば、



苦の下にも親はさこそ心苦しく思はめいかでか嬉しとは見  
む。さる親の心をば思はでた世の人目をのみつくるひて名  
を食るは、何の善き事ならむ。すべて孝行も何わざも世にけや  
けきふるまひをしていみじき事に思はするは、彼の國人の習  
ひにぞありける。

### 花月草紙 (松平定信)

#### 一 序

久しう浦わの里にすめる翁ありけり。め苳り鹽焼くいとまに  
は、えうなき藻屑かい集めて、鹽屋の窓の戸にかいはさみ置き  
たるを、世のえせものとりてかへりにけり。またのとし、行き  
て見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白波のよるよ  
るごとに數も積みしかば、つひにこの卷々となりぬとぞ。この  
藻屑のはしつかたに、月と花とのこと長々しく書いたれば、そ  
れをもて名たてしは、かのえせものせしことなりとぞ。あま  
のさへづりとこそいはまほしけれと、里の子はいひき。



二 花のこと

なしと聞けばありといはまほしく、悪しきといふをば善きと  
事かへていはむこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花はわ  
が國のものなるを、唐國にもありとてさま／＼ためしなど引  
きつけれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふ  
か、<sup>詩</sup>歌もなければ、なしとこそいふべけれど、いでや櫻といはで  
しも、花とだにいへば、こと木にはまぎれぬものをほの／＼と  
明けゆく山ぎは、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞みこめ  
たる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにのみ暮れ  
残すけしきなどいふは、淺かりけり。まいて、うてなの伸びやか  
なれば、近劣りするなどいふは、かの事かへて、さえおふ心に  
ふことなりかし。風にちりかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、  
おぼろの山に霞みこめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにのみ暮れ残すけしきなどいふは、淺かりけり。まいて、うてなの伸びやかなれば、近劣りするなどいふは、かの事かへて、さえおふ心にふことなりかし。風にちりかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、

軒ばにむかふも、明ぼのも、夕ぐれも、露のひるまも、めかるゝ時  
しなきを、ことにわが國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかた  
ちもゆたけく、匂ひさへもこちたからぬも、あやしきまでにこ  
そおぼゆるものなれ。さるをいづこにもありといふは、さらな  
り、曙夕ぐれなどとおもしろからむやうことば添ふるは、いま  
だ深くそめし心にはあらざりけり。すべてことばもていひ盡  
さむと思ふは、いとあさき心かな。

三 月のこと

月のさしのぼるころ、明ぼのの空おぼえて横雲のたなびきた  
るに、やゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、  
からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、  
かたや、さしのぼるころ、明ぼのの空おぼえて横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、



いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の  
かたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせむと  
しばし打ちまもるに、雲のはしつかたあかう見ゆるにぞ、出で  
はなれたらば、はやかゝらむ限はあらじと思ふに、いつのまに  
か、また白雲の月まち顔にたなびきて見ゆれば、胸打ちつづれ  
てうち見るに、初の雲より出でたる光いと新しう見えて、こと  
にさやけしかの待ちあたる雲にむかへば、又馳せ入るもいと  
つらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝか  
しこに、それと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見あた  
るうち、衣手もしめり行きて、露も蟲のねもさかりなりけり。  
つくづく、とむかひ居たれば、心のはてなきやうにこそおぼえ  
しか。

四 忠 孝

親に孝するは、この身を人となし給へる御惠、山よりも高く海  
よりも深き故なり。またその親もわれも子等も、かくながらふ  
るは、君の御惠なりといふは浅かりけり。そのむくいにて、孝し  
忠するものにはあらず。人知らぬ深山の梅の花とても、かをら  
ざるはなく、み谷の鶯とても啼かざるはなし。子となりては必  
ずかく、臣となりてはかくあるべき道は、もとより人にそなは  
りたることにて、鳥獸も親をしたひ子をはぐ、むものを。

五 ことばとがめ

霜夜をわびて水鳥の鳴くを、物知り顔なる人の、水鳥のさへづ



橋姫の巻  
源氏物語、橋姫の巻、「春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの羽うちかはしつ、おのかじしさへづる聲などを云々。」  
河漏・盆漏など書く。支那の食物にて吾が國の蕎麥に類したるも

るよ。」といひしを、おなじやうなる人うち聞きて、鶯のさへづるなどとは聞けど、水鳥のといふは、いと物ことにあらたまり、めづらしきことを聞きしかな。」といふ。初の人うそぶきながら、橋姫の巻に、「水鳥のはねうちかはして、おのがじ、さへづる聲。」とあるものを。」と、心得がほにいひたるもわるし。もとめてめづらしきことをいふべきものは、そばかりをこのみ給ふや。」といふべきを、からうはいかに。」といへば、「からきものこそ好み侍れ。」といひしを、問ひし人笑ひき。知るべき人にはいひもしなむ、人をも知らで、かやうの事いふは、聞き心より出づるなり。」と人のいひし。

## 六 學問のこと

雪螢  
晋書、車胤傳、「胤字武子、幼恭勤博覽、貧不常得油、夏月以練囊盛數十螢火、照書讀之云々。」  
同書、孫康傳、「孫康少清介、交游不雜、家貧無油、嘗映雪讀書云々。」  
五の常  
白虎通、「五常者何、謂仁義禮智信也。」  
五の道  
孟子、「使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼

「かの人、は、雪螢あつめし窓に年を積みて、書見る道に心をつくし侍るなり。されば世の中の事には、いとく侍り。」といへば、「さるこそまことの道まねぶ人なりけれ。」と、ほめものするものありとや。もとより道まねぶものは、五の常、五の道よりして、人ををさめ、己ををさむる道まねぶより外のこととはなし。されば世のことにさとく、今のあたりのみかは、千とせの前つ世のこと、見ぬもろこしの昔今のさまより、さかりおとらふるきざし、人の心のうへより仕ふる道のくさく、に至るまでも、明らかなるこそ道まねぶ人とはいふべけれ。この世の事に、おろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからむ。

## 七 晴雨のこと



有<sub>レ</sub>序、朋友  
有<sub>レ</sub>信。中庸、  
「君臣也、父子  
也、夫婦也、  
昆弟也、朋友  
之交也、五者  
天下之達者  
也。」

こよひの月夜云  
萬葉集、天智  
天皇、わたつ  
みの豊旗雲に  
入日さし、今  
宵の月夜あき  
らけくこそ。

日でりつゞくころは、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さらば今日こそは降りいづらめと見るに、その風もいつしかやみて、雲もむら／＼と絶間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降りつゞく頃は、松吹く風の音いといさぎよくて、はや霽れなむと見れば、雲間もはやむら／＼と青く、入日のかたは、こちたきまで紅深く見ゆるにぞ、こよひの月夜明けくこそ。と思ふに、月出づるころは、雲出でてまた玉水の音するものぞかし。代々の亂れ治まるきはも、わが心のうへも、この如きものとかや。

### 八 雨のこと

月の夜半こそ思ふくまもなく、心の底も澄みわたりぬるもの

なれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、またまさりぬるやうにおぼゆ。といへば、雨ぞいとまさりぬるを。といふ。いかに。と問へば、いでや早天の雨はさらなり、草木の花咲きみのるも、みなこの恵にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそ日のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそこのどかなれ。軒ばより霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、すみ捨てし蜘蛛の玉に玉ぬくけしき、庭の面の枯生の底に緑や、そひ行くも、柳の絲の動きもやらで露そふも、とものにいとこのどかなれ。燈火か、げても何となく光しめりたるに、



鐘の音のほのかに響き來るも、心すみわたりぬるものぞかし。  
その外梅が香のしめり、夜深くにほひわたるも、花にうしとか  
こちぬるも、あはれはありけり。春も老い行く頃、蛙の時得顔に  
すだくもをかし。ほとゝぎすの初音をいかにと思ふころ、村雨  
のはらくと降りいでたるも、五月雨の幾日も降りくらしで、  
書の卷々くり返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠  
ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬるころ、雲のみな  
ざり出づる勢ありて、風ひとしきり吹きおちたるに、柳蓮葉な  
んどの葉うら白く見せたるもすゞし。やがておほきやかなる  
雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて、物音も聞え  
ず、土のほひ來たるもいと心地よし。軒端は玉のすだれ懸け  
たらむやうに、玉水の絶えまなく落ちたるに、庭はひとつみづ

うみとなりて、あるは瀧おとし、または水走らせたるに、人々し  
ばし物いはでうちまもりわたるもをかし。やゝ雲薄くなれば、  
池の面には、數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出で  
て餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出でしかたは、はや空の  
一しほ緑に見えて、虹など見ゆるに、木々の緑の庭濼にかげ  
見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音に驚きて這ひ出で  
たるが、今日のは若かりし時のごと、よく晴れにけり、いま時の  
はかく霽るゝこと稀なりなど、はや繰りこといふもあり。彼  
はかくあはてしなどいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、今日は  
蚊も少かるべし、雷の音もいとかすかなり、このごろの暑さも  
忘れぬとて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露  
も玉なすに、肥えふくれたる蛙のもの、まぢ顔に空うちならみ



て、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來るころの雨は、昨日にかはりて何となう淋し。萩のうは風外山の鹿の音など、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞きなれしかけひの水の音までも、あはれ深くこそ。月の前のむら雨もまたをかしまいてや。や夜寒のころ鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染めなむと思へば、茸などおひいでなむ、栗もはや落つべしなどと、わらはべのもの淋しげに、燈火にむかひつゝ、いひ出づるも、げにさまぐなり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、撞く人の心をもあはれと思ふばかり感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきてひとさかり見するも、尾花の露おもげにうちしほれ

たるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきぐし。朝顔の、皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲きいでたるが、晝過ぐるまで萎みおくれたる、又あはれなり。野分の風は、おどろくしきものから、雨は夕立におとらざれど、さすがにあはれを添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれ深き物には侍らずや。といへば、かうやうにいひならべては、げにもといふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨はをとつ日より降りいでしをとおもふ心はかはらじと、心の中に思ひて聞き居しもまたをかしかりけり。

### 九 遠慮遠謀



遠慮遠謀  
論語「子曰、  
人無遠慮、必  
有近憂。」

心風  
心經病のこ  
と。正字通、  
「今俗狂疾及  
四支偏癱皆曰  
風、別作瘋。」

遠慮遠謀せざる人は、とみの禍にあふことは人の知れること  
なり。その遠慮遠謀に似たるやうにても、殊更に物おぢし、例の  
ことわりに屈したる心よりいでくれば、なほ人の物笑とこそ  
なりぬれ。かの物おぢして何くれと心くだくものに、君がかた  
はらそふもの、もし心風病まば、いかゞし給はむ、男をうなをも  
しぞけて、黒金のひつに入りても居給はむか。君もし心風病み  
給はばいかにし給ふらむ。」といひてけり。またあるものが、打刀  
かたはらをさらず、たちゐる物々しくして、いでかたき來らば  
といはむばかりにかまへたる人に、「君いね給ふとき、鎧著てや  
臥し給ふらむ。」といひき。またそのたぐひの人が、鎧を金つくし  
て作らせたるを見て、「いかにもまたくそなはりし御着背長な  
り。をしきことには、この面頬の目の穴もふたぎ給へ。矢なんど

の此處へ來たらむが、あやふくさふらふ。」といひき。

### 一〇 和歌の教

雲の上のやむごとなき君おはしましけり。その御子の御かた  
はらにまし／＼けるが、そともより風の吹き來て、ともしびの  
光定まらざりければ、人召して、風の吹きくるぞ。ともしびも消  
えなむ。障子たてよ。」といひ給ひければ、父君ことにいかり給ひ  
て、「さやうなる言葉づかひしては、歌はいかでか詠むべき。」とて  
むづかり給へば、御子はいと畏れてしぞき給へり。御次に居た  
るもの、いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひて問ひ奉  
りければ、「ものをつくしていふべきものにはあらず。」とのたま  
ひしとぞ。



沖こぐ船に云々  
白氏文集、「秋  
雁橋聲來。」

一一 月なき夜半

月なき夜半はいと心の底澄みまさるものなりけり。海のおも  
て暗うして、よせくる波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せ  
ぬ風の袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はな  
ほ蟲の音もきそひ行くに、千草の花の色も見えて、沖こぐ船に  
まがふ雁がねのわたるも、いづこなるらむとあはれなるに、浦  
のあしべに聲あはせたるもをかしまいて、曉さるに月のいづ  
れば、宵の入日の残れるたぐひにはあらず。海のおもて黄金の  
波の満ちくるにぞ、言葉にも述べしとは思はず。昔いぎたな  
くて、有明の月にうとかりしころもありけりと思へば、口をし  
きものから、また羨ましく思へり。それより思の移り行きて、げ

虎の皮云々  
揚子法言、「羊  
質而虎皮。」

に古は悪しき波にも舟浮けて、鯉釣りしこともありき、または  
いと寒きころ、海に入りて鮑とりしこともありしが、いまのわ  
かうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。そのころの  
昔物語に聞けば、浦曲の戦のおそろしさに、妻子うち連れて、み  
山へ入りし世もありしと聞きつるに、月なき空にも心のたの  
しびを極めぬるは、いかにぞやかゝること、かのわかうどの  
老いたるさまするをも、あはせていはまほしけれど、また例の  
老いぼれて、繰言いふとやむづかりなむ。

一二 人を責むること

「人を責むるは、あらはなるを責むべし」とか聞きし。まづ面あら  
ためたらば、よしとこそいはめ。かれは虎の皮著ぬる羊なり。」と



はいはじ。羊にもせよ、虎の皮著たらば、虎にしてこそやしなはめ。さらば千里をば走らずとも、羊の力のおよぶだけは走りもしなむ。外を責めて、内を責めざれ。」と、昔より聞きしを。

一三 日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふは物かは、事々に新に物々に新なるべし。昨日の事になれて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひてやぶれとるも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ愚なる人に欺かるゝも、ひとつひとつに新ならねばこそありけれ。昨日憎しと思ふこと心にそみ、こぞの嬉しと思ふこと心につきて離れねば、それより根ざ

日に新なり  
湯盤銘、「日  
新、日々新、  
又日新。」

して迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、萬づにかよはして身を終ふるまでも忘るな。」と語りし老人もありけり。

一四 文まねぶこと

文作り詩作らむと硯ひき寄せて、朝より夕つかたまでも思ひこらしむたるに、「こは姨君よりの御せうそこなり。」ともてくれば、ふんおしきりて、「これよりいらへつかふまつらむといへ。」といふ。こはむこ君よりのなり。「せうとの君よりの。」とて消息いだせば、見もやらず、「俗事紛々たり。」などいひて、側へ投げやりつ。このいらへかくも文なり。今日の事なすこそ學ぶ道なれ。かの「料量平かなり、畜蕃足す。」とはいはずや。かゝる目のまへにある事をもよそごとと思ふぞはかなき。されど我がざえをも足れり

料量平かなり畜蕃足す  
史記、孔子世家、孔子貧且賤、及長嘗爲季氏吏、料



とし、いさゝか漢土（漢）の書籍手（書）まさぐりしばかりにて、わが邦の軍物語など見て、時の勢も知らず人情をもわきまへず、例のこ  
とわりいひつものりて、わらはべなど教へひき入れむとするは、  
いと害とこそなりぬれ。風流に流るゝものは、道知る人に笑は  
るゝのみにてやあらむ。

### 一五 友に交はる道

「友に交はる道は、いかなることか心得べき。」といふに、「友はその  
所長を友とすべし。古きこと好むには、そのことに友とし、武技  
好むには、それに友とし、歌よむものには、その道に友とするぞ  
よき。さるに歌とてもこのふりは悪しかり、かれにまねび給ふ  
はひが事なりなどといふにも及ばじ。たゞ交はりてこそある

管仲・鮑叔の  
二人の深き交  
をいふ。杜  
甫、「君不見  
管鮑貧時交、  
此道今人棄  
如土。」

べけれ。古にいふ管鮑の交といへども、この二人おなじ徳おなじ  
心なりしにもあらじかし。世の中に同じ心の人といふものは、  
いと稀なる事なるべし。たゞわが好めるかたに引き入れむ  
とするもうるさし。この人、このところは長じぬれど、こゝはい  
と短し。その短きところを引きのべむとするはいと苦し。さ思  
ふ我もまたその短き所あるものを。ことに思ふことみな諫め  
ものせむとするを、かの信と思ふはたがへりけり。交はるがう  
ちにも、知己の人はいと稀なるものなり。それらよく言葉を求  
めなば、もとよりいふべし。されどしばしばすべきにはあらず  
かし。浅き契の友なりとても、友といふうちならば、その人のう  
への存亡にかゝはるばかりのことならばいふべし。すべてし  
ひてかくせむ、かく救ひてむと、まげてもと思ふは、みな中道に



は背けりといはむ。たゞその所長を友とすれば、交はりがたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によてわがかたの亂れむとするは、皆その短を友とする故なり。」と答へしものありきとや。

### 一六 今参りのをうな

おなかより出でたる今参りのをうな、年もいと若かりければ、人々なにくれと欺きなどしけり。たそがれのころ使に出でぬ。歸らむころはまだ暮れじ、かれを驚かしてむと、門のうちなる柳のいと茂りたるあたりへ白き衣引きまとひ、女の髪亂せるやうにつくりて置きけり。もののけぢめもさだかならぬころ、歸りにけり。柳の前をとほりたらば、聲あげて逃げまどふべし

北野  
北野天満宮。

と、息を殺して垣間見おししが、何ともいはで過ぎにけり。柳のあたりには、この頃變化のものの出づると聞しが、もし見しや。」と問へば、げにも柳のあたりに白き衣著し女のたちておしやうに見し。」とて驚くけしきもなし。いかにしておそろしくは思はずや。」と問へば、都へ出づる頃、たらちねの、この観音の御守と、北野のとは、肌はなさでよとて、袋に入れて給ひぬ。變化のものあらば、観世音も北野の御神もましまさむ。かれわれを殺さむとせば、守り給ふべし。神も佛もなき世ならば、變化のものもあるまじと思ひしなり。」といひしとぞ。

### 一七 隅田川原の花見

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見むと、小船に乗り



て行きたるが、花見むとたちいづるもろ人のさまげにや都のみやびを盡せり。さまざまの心々にうち向きて行くに、女房なども何か口たゝきつゝ、心そらにありくもあり。馬馳せて花をも目にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々うちかこみてつゝ、ましげに行く女もあり。あるは木蔭にてはや瓢傾け、何やらむ矢立いだし書いつけ、かうよりして花の枝につけて、われは顔なる風情なるもあり。今日はげに晴れに晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見えたれど、またそれをうち眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日はとみに雨風のあるなどいふことは、露思ふものもあらかし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかに樂しび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひうれひも

王世の民  
王者之民の  
意。孟子、盡心  
篇、「王者之民  
皞皞如也、王  
者之民皞々如  
也。」

花をみすてて云  
古今集、「春霞  
立つを見すて  
てゆく雁は、  
花なき里にす  
みやならへ  
る。」

なきに、この花はも昔よりつきぬ御恵ふかき露に生ひそひしとやらむ聞けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひもよらず、いつもかく空晴るゝものとはばかりも思はぬ輩おほからむなど思ひかへして、四方をふとうち見れば、筑波嶺のあたりいと細くひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて簔も笠もはなたであしが、はや簾おしたて漕ぎかへるを、いかにこの花を見捨てて歸るは、かりがねにつらさやならへる。櫓の音ばかりまなべよかし。など、口々に笑ふを、耳にもいれで漕ぎさりぬ。いつかその雲のいとひるごりてけるが、かのもがらは露も知らず。日のかげろふも知らず、今日は暑きば



櫓の音云々  
古今集「秋風  
に聲をほにお  
げて来る船  
は、あまのと  
渡る雁にぞあ  
りける。白樂  
天「青虹橋影  
出、秋雁櫓聲  
來。」

かりなりとて、肌ぬぐもあり、又は衣などぬぎて馳せありくも  
ありぬべし。雨に先だつ風のひと通り吹き落ちたれば、こは花  
よと思ふまもなく、いさご吹きたてたれば、たゞ驚きてゐるが  
うち、雨の降りいでたり。初はこゝちよき雨などともいひたら  
むが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せて歸るもあれば、  
驚きあわてて、堤よりまろびて落つるもあり。女などはいとい  
たう見苦しきまであわてふためきて、はじめ装ひしをみづか  
ら夢とや思ふらむさまなり。まして酒に酔ひて濡るゝも知ら  
ず顔に笑ひなどするもあれば、思ひよらぬおろかなる雨かな。  
と怒りのゝしるもありぬべし。かの舟や早く漕ぎゆきぬれど、  
わが住む浦は遠ければ、とある橋の下に船とめてゐしが、橋の  
上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに聞えぬ。はや雨も

かぞいろ  
父母のこと。

かぞふるばかりに川のおもに見ゆるころ、夕月の殊更に新し  
くみがき出でたれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかゞあら  
むと、漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間  
にほのゝと月の見えたるはわがために造りなしけむと思  
ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけむ、この月などは  
思ひもよらであらむなど、ひとり思ふも何となく心おごり行  
きぬ。かぞいろも、われひとり人にこえてこゝちよしと思ふと  
きは、といましめ給ひたれば、またあやまちやしぬべくとおそ  
ろしくおぼえければ、飲み残したる酒携へてつひに漕ぎかへ  
りぬとか。



擬古文選終

大正十二年六月十五日印刷  
大正十二年六月二十日發行

擬古文選  
定價金參拾貳錢

編者 明治書院編輯部

不許複製

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地  
株式會社 明治書院  
取締役社長 三樹一平

發行所 東京神田錦町 株式會社 明治書院



323  
507



終